

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第113集

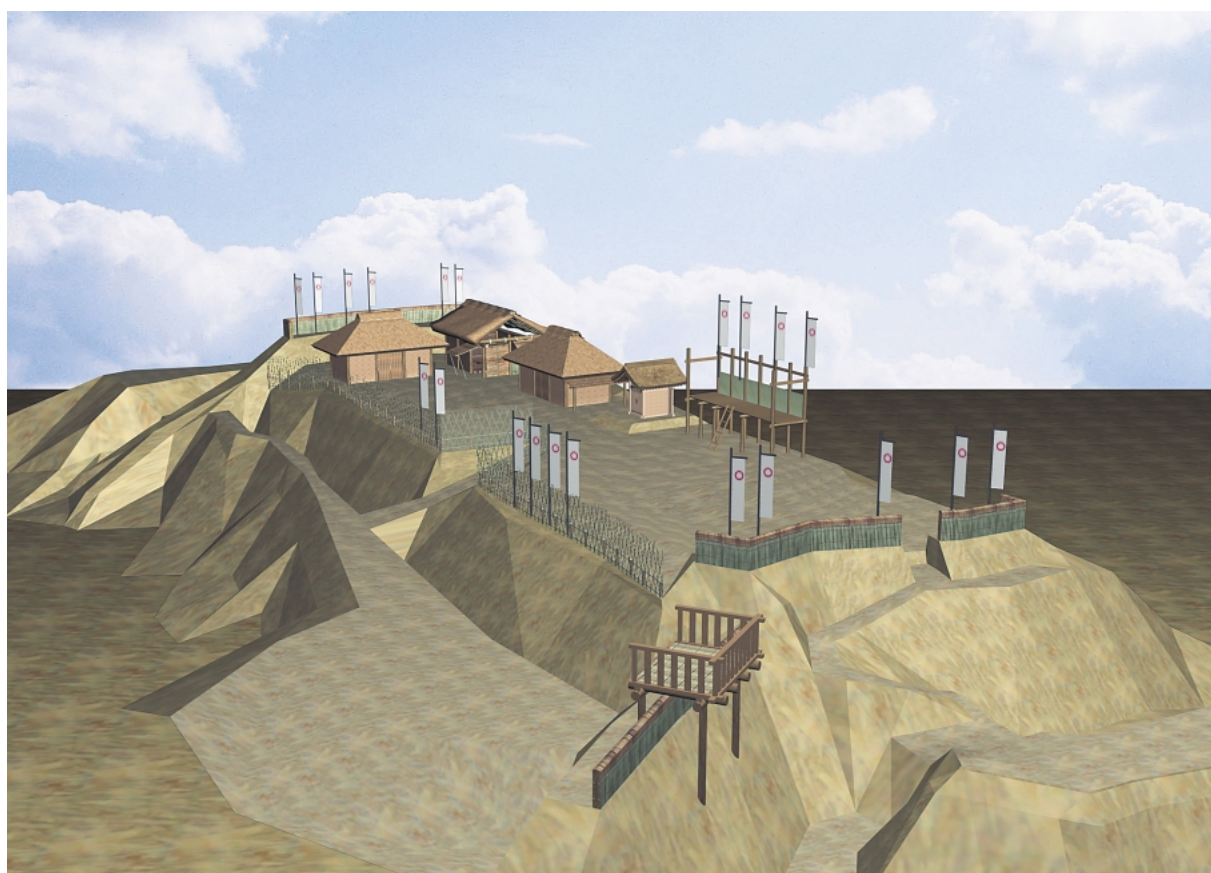
東 端 城 跡
御 船 城 跡
矢 並 下 本 城 跡

2002

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

矢並下本城跡



矢並下本城推定復元図

例 言

1. 本書は愛知県豊田市矢並町桑原田に所在する矢並下本城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施及び整理報告書については国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 平成12年6月に範囲確認調査を実施し、本調査は平成13年6月～同年9月である。
4. 発掘調査は平成12年度分を花井 伸（主査、現三好町立三好中学校）、小嶋廣也（調査研究員）、成瀬友弘（調査研究員）が担当し、平成13年度分を竹内 睦（主査、現東海市立名和中学校）、池本正明（主任）、成瀬友弘が担当し、国際航業株式会社の支援を得た。
5. 調査・報告書の作成に際しては、次の機関からご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、国土交通省、
豊田市教育委員会、国際航業株式会社、株式会社パレオ・ラボ
6. 報告書作成に関わる整理作業には成瀬友弘があたり、小嶋そのみ（調査研究補助員）、川名詳子（整理補助員）、小倉明子（整理補助員）の協力を得た。なお石材の鑑定は堀木真美子（調査研究員）が行った。
7. 写真図版の撮影は、遺構を坂野俊哉（国際航業株式会社）が、遺物は福岡 栄氏（名古屋市美術館）が撮影した。
8. 報告書の編集・執筆は第3章第3節を小嶋そのみ、その他と編集を成瀬友弘が行った。
9. 矢並下本城跡の立体図面は国際航業株式会社が作成した。
10. 本報告で使用している遺構略記号は以下の通りである。
SA…堀、SQ…土塁、SD…溝、SK…土坑、P…小土坑、SX…その他の遺構（虎口遺構等）
11. 本報告で使用する遺構埋土等の色調については、『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編著を参考に記述した。
12. 遺構の空中撮影、及びその図化は国際航業株式会社による。
13. 調査区の座標は、国土交通省告示の国土座標第Ⅶ系に準拠する。ただし、表記は「日本測地形」（旧基準）とした。
14. 調査の実測図、写真の記録は財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
15. 調査による出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

矢並下本城跡 目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯	1
1	遺跡の位置	
2	調査にいたる経緯と経過	
3	調査方法	
第2節	遺跡をめぐる環境	2
1	地理的環境	
2	歴史的環境	
第2章	遺構	4
第1節	地形測量の結果	4
1	概要	
2	平坦面	
3	北側尾根	
4	南側尾根	
第2節	発掘調査の成果	6
1	基本層序	
2	調査の概要、検出された遺構	
第3章	遺物	22
第1節	遺物組成と出土分布	22
第2節	陶器類	22
第3節	石製品	26
第4節	金属製品	26
第4章	自然科学分析	27
第1節	放射性炭素年代測定	27
1	はじめに	
2	試料と方法	
3	結果	
4	考察	
第2節	まとめ	28
第5章	まとめ	29
1	矢並下本城跡の考古学的成果	
2	地域史からみた矢並下本城跡	
3	まとめ	

挿図目次

- 第 1 図 調査区位置図 (S=1/10,000)
- 第 2 図 矢並下本城跡周辺の中世城館 (S=1/50,000)
- 第 3 図 矢並下本城跡縄張図
- 第 4 図 矢並下本城跡地形測量図 (S=1/700)
- 第 5 図 I 期主要遺構図 (S=1/600)
- 第 6 図 II 期主要遺構図 (S=1/600)
- 第 7 図 基本層位 1 (A-A'、B-B') (S=1/100)
- 第 8 図 基本層位 2 (C-C') (S=1/100)
- 第 9 図 基本層位 3 (D-D'、E-E') (S=1/100)
- 第 10 図 基本層位 4 (F-F'、G-G') (S=1/100)
- 第 11 図 基本層位 5 (H-H'、I-I'、J-J'、K-K'、L-L') (S=1/100)
- 第 12 図 S X 3 遺構図 (S=1/100)
- 第 13 図 II 期建物平面・断面図 (S=1/100)
- 第 14 図 S X 4 遺構図 (S=1/100)
- 第 15 図 S K 5・70 平面・断面図 (S=1/20)
- 第 16 図 S X 1 遺構図 (S=1/100)
- 第 17 図 S A 1 平面・断面図 (S=1/50)
- 第 18 図 S K 1・204 平面・断面図 (S=1/20)
- 第 19 図 遺物実測図 (陶器類)
- 第 20 図 遺物実測図 (瓦)
- 第 21 図 遺物実測図 (石製品・金属製品)
- 第 22 図 矢並下本城跡主要遺構変遷図 (S=1/1,200)

表目次

表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

写真図版目次

- 写真図版 1 調査区遠景
- 写真図版 2 調査区全景
- 写真図版 3 S D 5・6、S D 3 1・S D 2 6
- 写真図版 4 S X 1、S X 4、S B 1・2・3
- 写真図版 5 S D 1、S D 2、S Q 1・S A 1
- 写真図版 6 S D 2 7、S D 1 5・1 6、S K 1
- 写真図版 7 S A 4、S D 2 遺物、S D 1 遺物
- 写真図版 8 遺物写真

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1 遺跡の位置

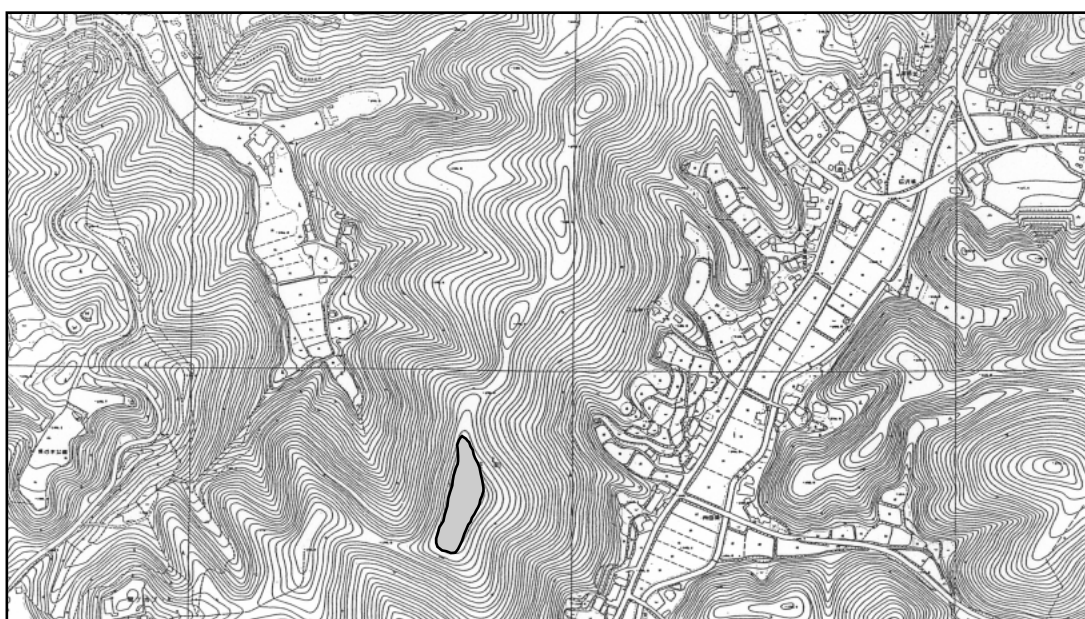
矢並下本城跡は、愛知県豊田市矢並町桑原田に位置する遺跡で、県道則足豊田線と県道松平志賀中金線が北方約1kmのところで合流する。本遺跡は直線距離にして鞍ヶ池公園から南東へ約1km、豊田市の市街地から東へ約10kmにある。

2 調査にいたる経緯と経過

国土交通省において計画された東海環状自動車道の建設に際し、その予定地内に中世の城館跡である「矢並下本城跡」が所在しており、事前調査及び記録保存をする必要性が認められた。そこで国土交通省より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査は、平成12年6月に範囲確認調査（200 m²）を行い、その結果をもとに平成13年6月～9月の期間で本調査（4500 m²）を実施した。発掘調査終了後、平成14年度に出土遺物の整理作業、及び報告書の作成を行った。

3 調査方法

はじめに遺跡全体に茂っていた樹木や下草等を人力により除去した後、国土交通省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠したグリッドを設定し、遺跡のある山地頂部について現況の地形測量を行った。次に遺跡の形状に合わせてトレンチを設定し、基準層位を確認した上で、現地表面から表土のみをバック・ホウにより除去した。その後、手掘りで遺物包含層を除去して遺構検出をする方法をとった。調査の進行上、基本的に遺構測量はヘリコプター・ラジコンヘリによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50の基本平面図を作成したほか、重要部分については補助測量図を手測りにより実施した。



第1図 調査区位置図（S = 1/10,000）

第2節 遺跡をめぐる環境

1 地理的環境

矢並下本城跡は豊田市矢並町桑原田に所在する戦国時代の山城である。この遺跡が立地する矢並町は、愛知県の中央に位置する豊田市東部の高橋地区に属し、三河高原南西端の丘陵部から矢作川流域の平野部への出口の標高100mほどのところにあたる。集落は矢作川に注ぎ込む巴川の支流である矢並川が作る谷地形に沿って南北に広がっている。

矢並下本城跡は矢並町集落の南西の南北にのびる痩せ尾根頂部に立地し、標高190m前後である。城跡の東西は谷地形となっており比高差は90m前後となっており要害性の高い場所を占める。

2 歴史的環境

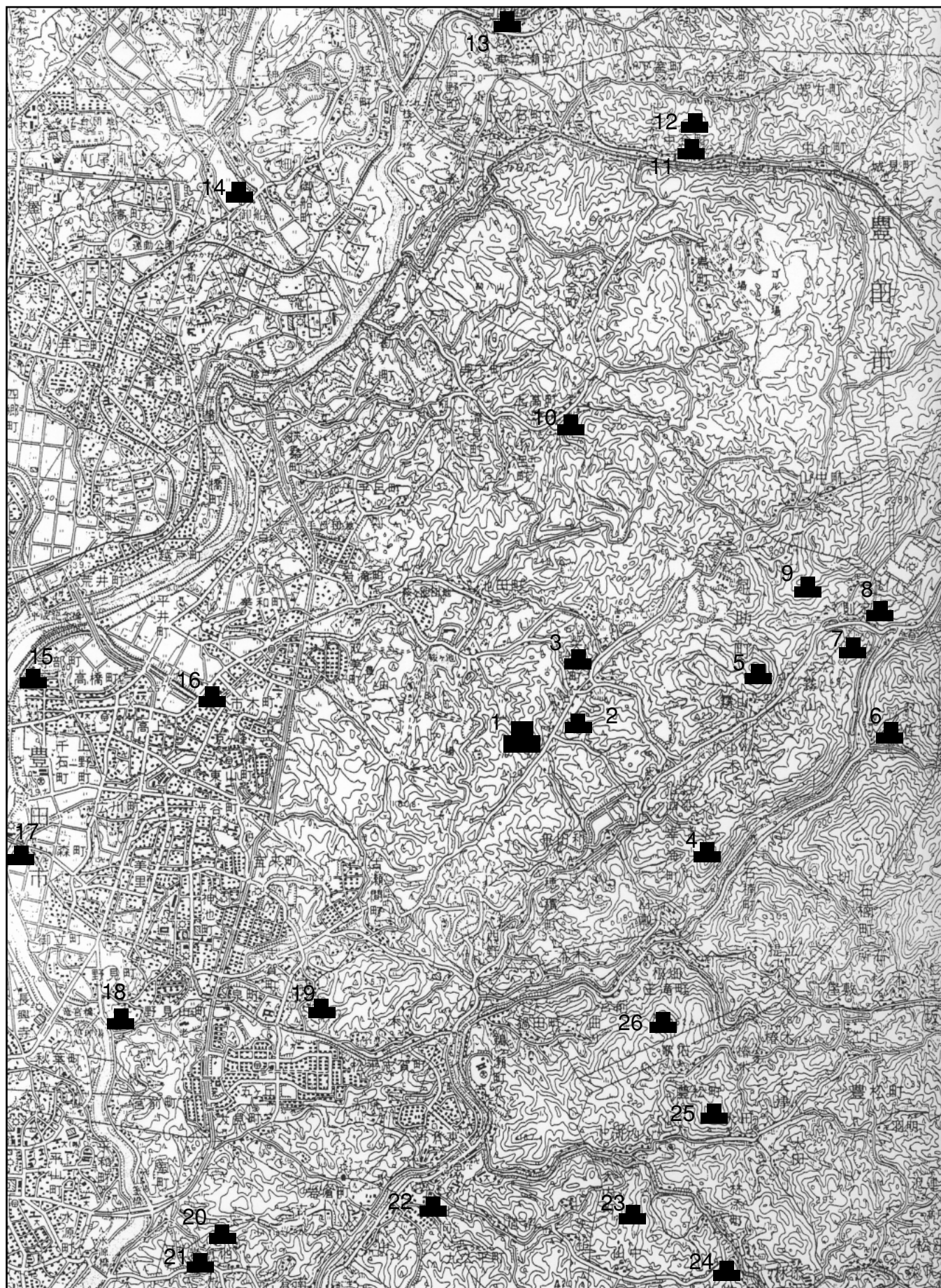
豊田市東部の歴史を見てみると、まず本遺跡の西へ約1.5kmのところに酒呑ジュリナ遺跡がある。この遺跡からは微隆起線文土器や押型文土器・捺糸文土器等が出土しており、縄文時代草創期から早期にかけてこの地域に人々の生活が始っていたことが分かっている。その後人々はしだいに矢作川の流域へと生活の場を広げていったものと考えられる。矢作川東岸に位置する高橋遺跡等はその代表的なものであろう。高橋遺跡は弥生時代から平安時代までつながる遺跡であることが昭和41年からの調査で分かっている。この遺跡周辺は平安時代に編纂された『倭名類聚鈔』にも賀茂郡高橋郷として記録される地域になると思われる、この頃には現在まで続く集落の原形が出来上がっていたものと考えられる。荘園制の発達に伴いこの地域は高橋荘に属することとなり、鎌倉時代には中条氏が地頭として高橋荘に入部してきた。この中条氏のもとで勢力を拡大したのが矢並を本拠とした鈴木氏であった。鈴木氏は、14世紀中頃には高橋荘東方政所職「矢並郷平内大夫入道善阿（いわゆる鈴木善阿弥）」として『貞和五年年中祭礼記』に登場し、その後矢並を出発点に現在の豊田市東部から足助町・小原村にまで勢力を拡大し、矢作川の水運や中世の足助街道を抑える地点を占めるにいたった。こうした鈴木氏の勢力拡大に伴いこの地域の中世城館が整備されていったと考えられ、矢作川東岸の豊田市寺部町から足助町にかけての城館跡の多くは鈴木氏によって築城されたものとの伝承を残している。矢並下本城跡もこうした城の一つと考えられる。鈴木氏は、後に南から勢力を伸ばしてきた松平氏との抗争等によって勢力を衰退させ、16世紀後半には豊田市東部は鈴木氏に代わり松平氏の勢力下に入ることとなる。

江戸時代に入ると豊田市東部の多くは尾張藩家老渡辺家の所領支配を受けた。明治以降は東加茂郡高橋村となり第2次大戦後には町村合併で豊田市の一部となり、現在は落ち着いた住宅地として人々に生活の場を与えている。

参考文献 豊田市 1976「豊田市史」

右図凡例

- 1 矢並下本城跡 2 鈴木善阿弥屋敷跡 3 矢並上本城跡 4 酒呑城跡 5 霧山白山城跡 6 下佐切城跡
7 則定小畑城跡 8 則定城跡 9 椎城跡 10 鷹見城跡 11 中金城A跡 12 中金城B跡 13 御船城跡
14 寺部城跡 15 市木城跡 16 森城跡 17 丸根城跡 18 古瀬間城跡 19 岩倉城ノ浦城跡 20 岩倉城ノ畔城跡
21 中垣内古屋敷跡 22 九久平城跡 23 大給城跡 24 林添館跡 25 松平城山城跡 26 梶ヶ城跡



第2図 矢並下本城跡周辺の中世城館 (S = 1/50,000)

第2章 遺 構

第1節 地形測量の結果（第4図）

1 概 要

城跡と考えられている山地頂部について現況の測量を行った。矢並下本城は山地頂部の大部分を占める平坦部、北の尾根筋、南の尾根筋からなる。以下各部分について述べる。

2 平坦面（曲輪1）

平坦部の平面は主軸方位がN-30° -Eの隅丸長方形で、南北66m、東西18mの規模を測る。標高は191m～190mで西から東に緩やかに傾斜する。

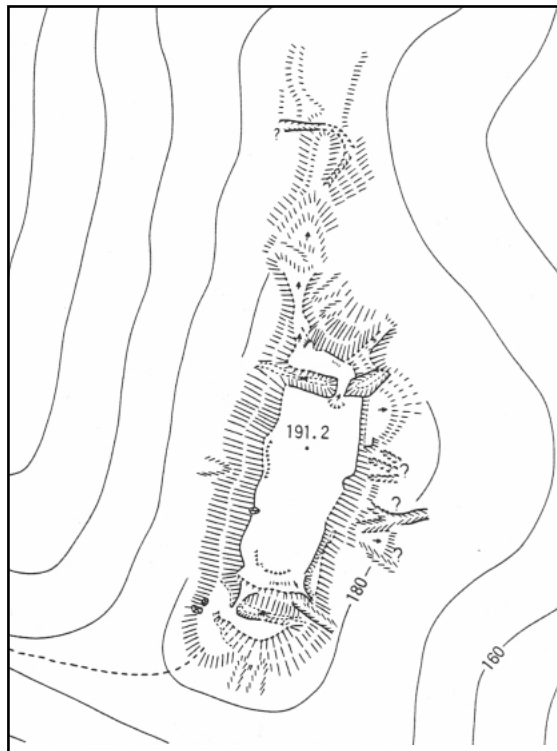
平坦面の南北は堀切と思われる幅6m、深さ1mほどの溝があり土橋状の高まりも確認された。この堀切状の溝の内側には、土塁の痕跡と思われる幅2mほどの膨らみが東西に走り、南側については東側の谷に向かって落ちている形状が見て取れた。また、西側中央付近に5m×5mの低いマウンドが認められ、周囲より0.2m～0.3mほど高くなっている。尚、この平坦面の北東角付近に一段下がったところに小さな平場（曲輪3）が付随している。この部分は標高189m～188mで最も広い部分は幅20mほどで東に向かって緩やかに傾斜している。

3 北側尾根

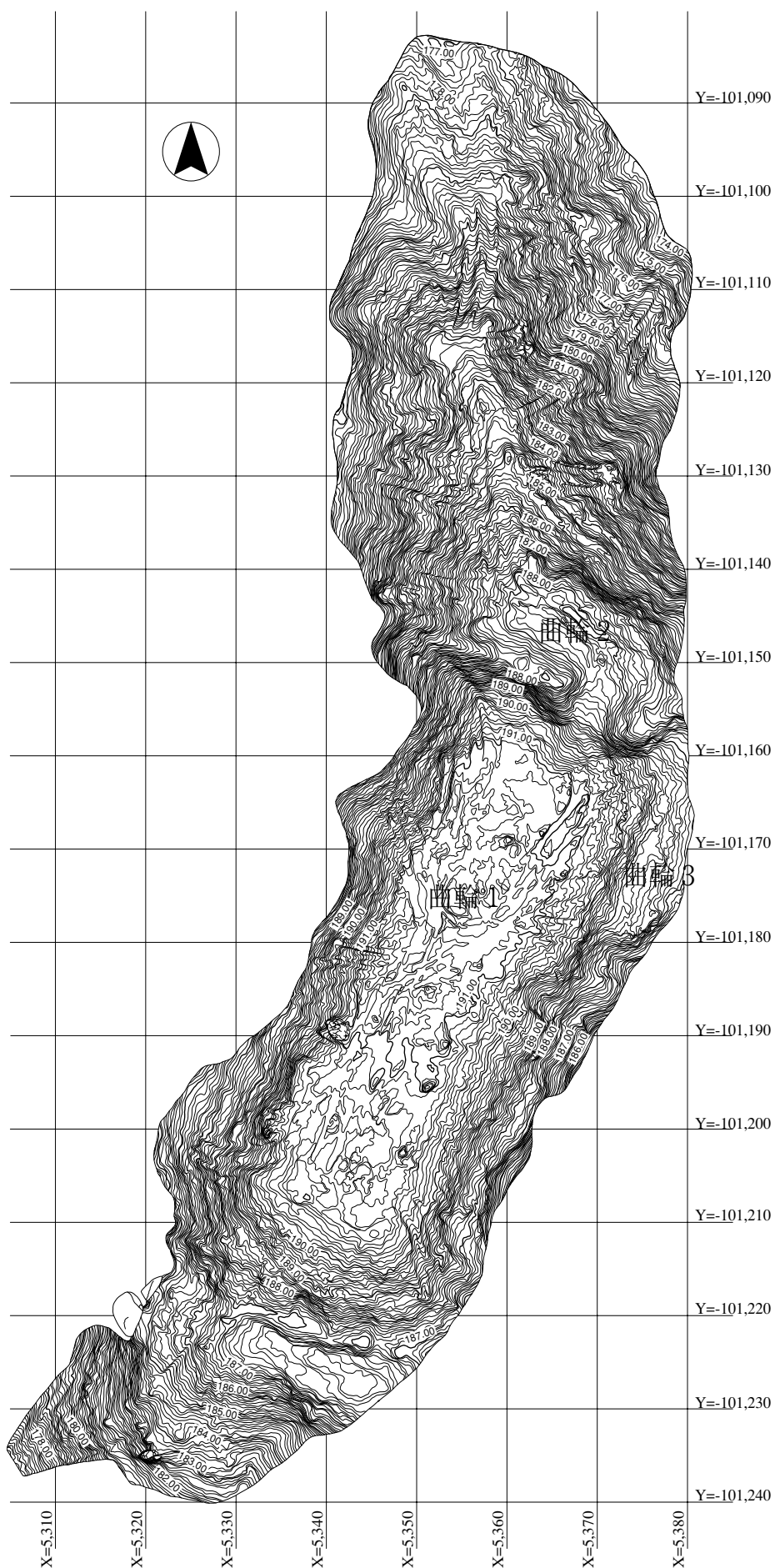
平坦面北東から土橋状の部分を超った標高188mほどのところに馬出し状の東西17m南北6mの平場（曲輪2）があり、この西端から尾根筋がN-15° -Wの方位で、北に向かって緩やかに傾斜している。尾根の東西の斜面は、自然地形なのか豎堀なのか判然としない幅2mほどの傾斜に平行する溝が数条確認できた。

4 南側尾根

平坦面南西から土橋状の部分を超った標高188mほどのところに北側と同じく馬出し状の東西19m南北4mの平場が見られる。この平場から南西と南東に尾根がのびる。南西側は緩やかな傾斜で標高184m付近の花崗岩の露岩の点在するところまで下ると、急傾斜で3mほど落ちてから緩やかな尾根となる。一方南東側は緩やかな傾斜のまま細い尾根が南へ続いている。



第3図 矢並下本城跡縄張図
『愛知県中世城館研究報告』より



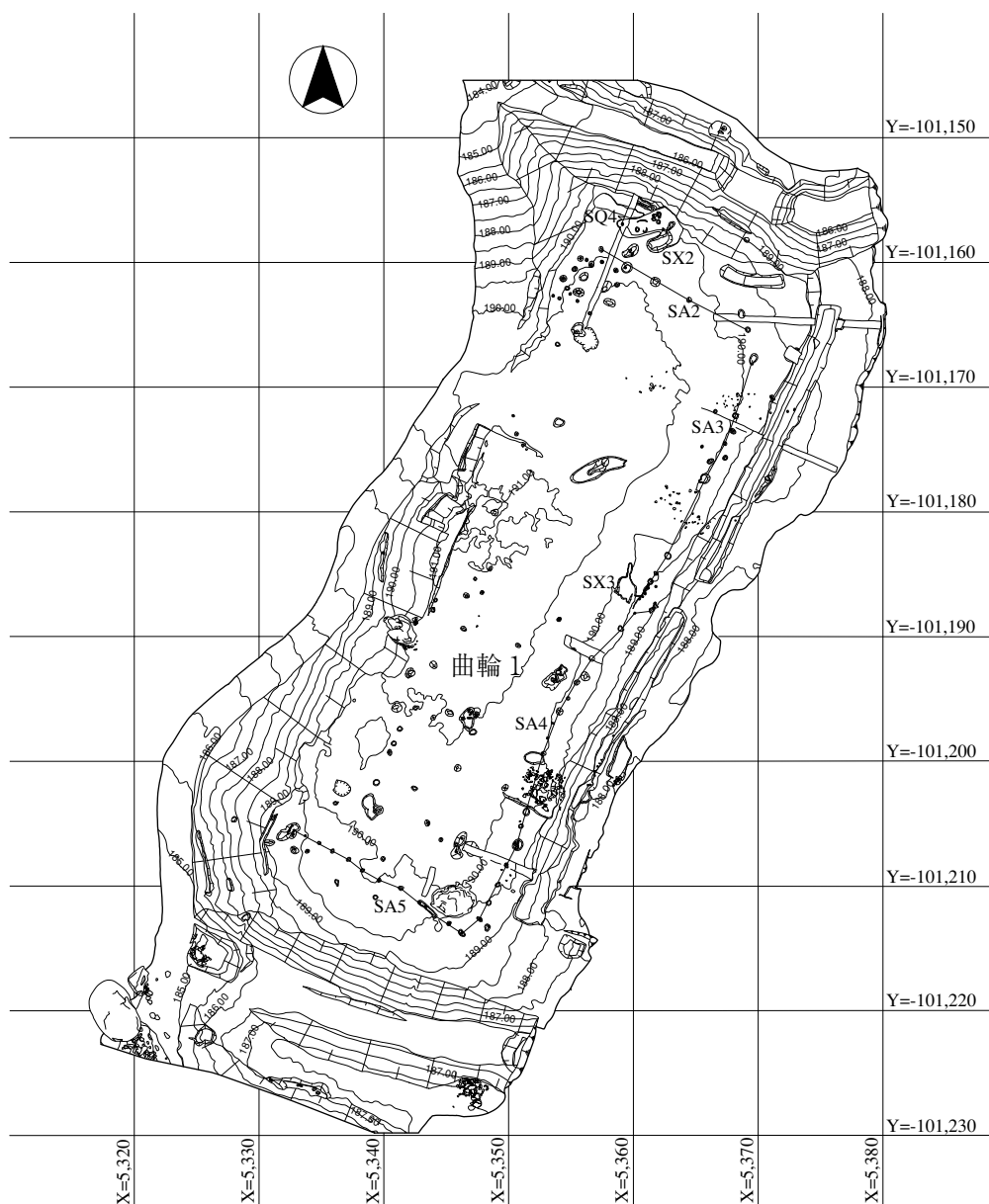
第 4 図 矢並下本城跡地形測量図 (S = 1/700)

第2節 発掘調査の成果

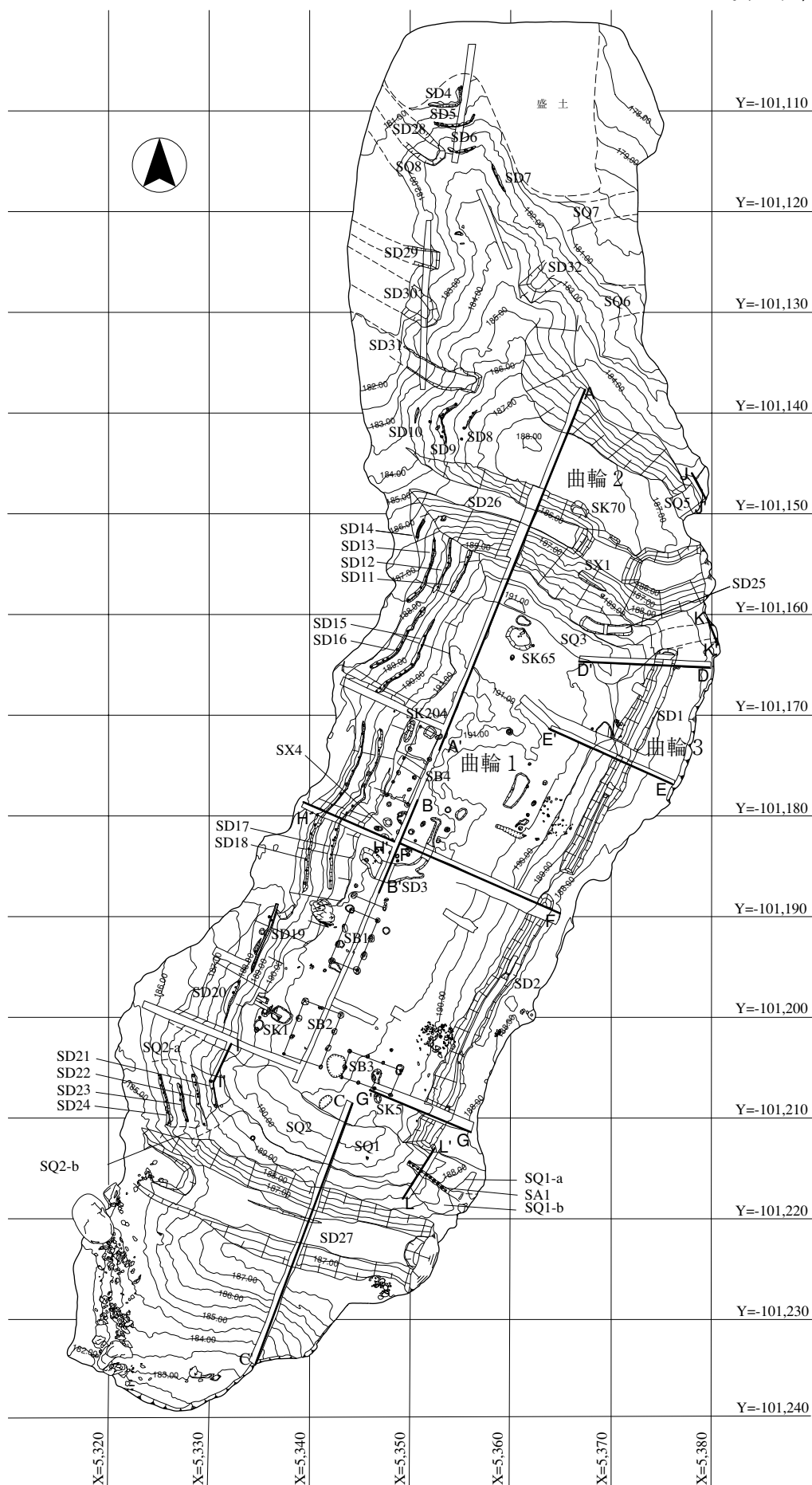
1 基本層序

地表下には、クヌギ・カシ等の根によって土壌化した表土（褐色～オリーブ色砂質土）があり、その下部には花崗岩やその風化土の地山があらわれる。ただし、平坦面については整地層と思われる黄褐色～明赤褐色粘質シルトの層が存在し、東に向かって厚くなっておりところによっては50 cm以上となっている。

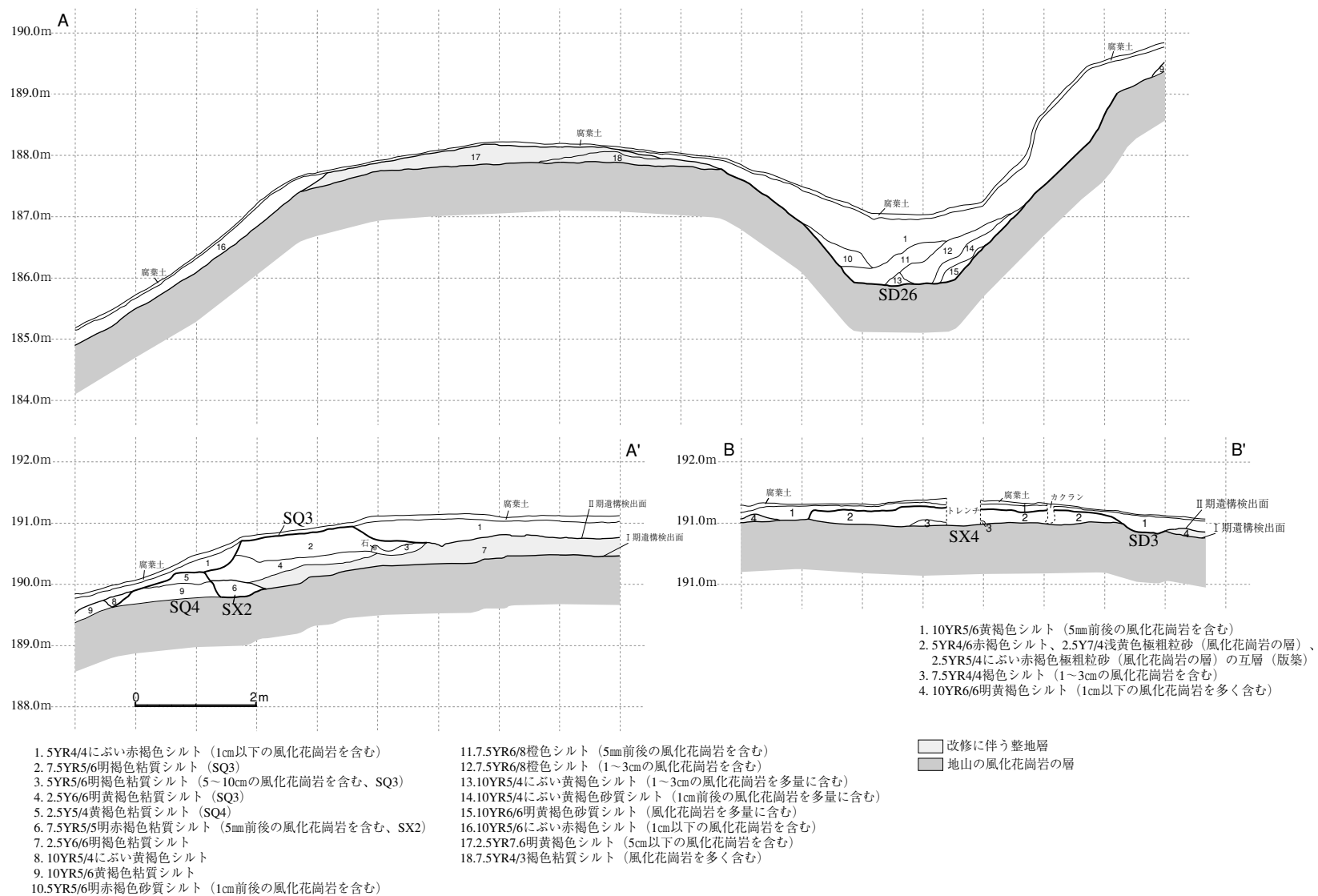
したがって遺構の掘削調査としては、南北の尾根では地山直上での検出、平坦部については表土を取り除いた整地層の上での検出と地山直上での検出の2面での作業となった。



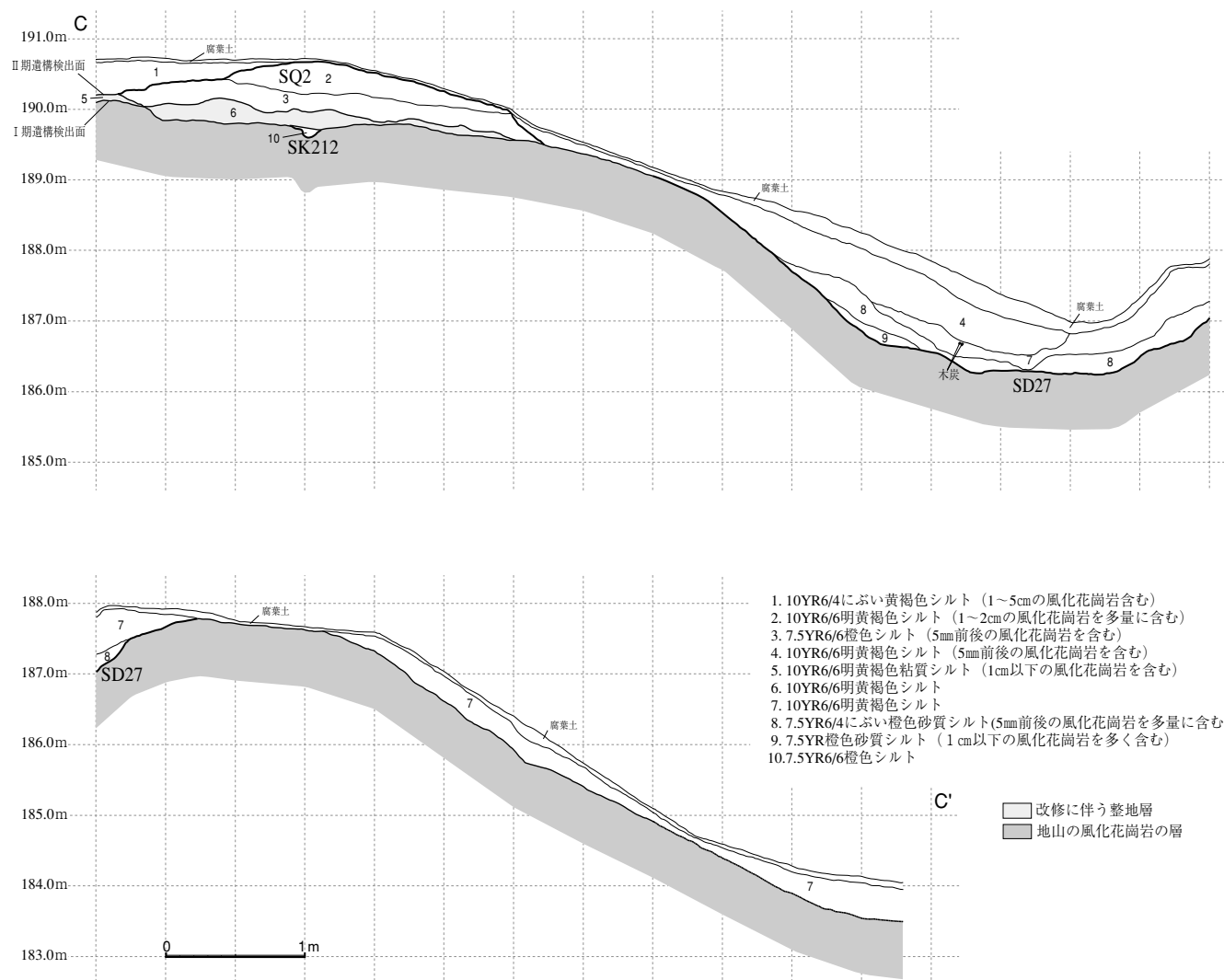
第5図 I期主要遺構図 (S = 1/600)



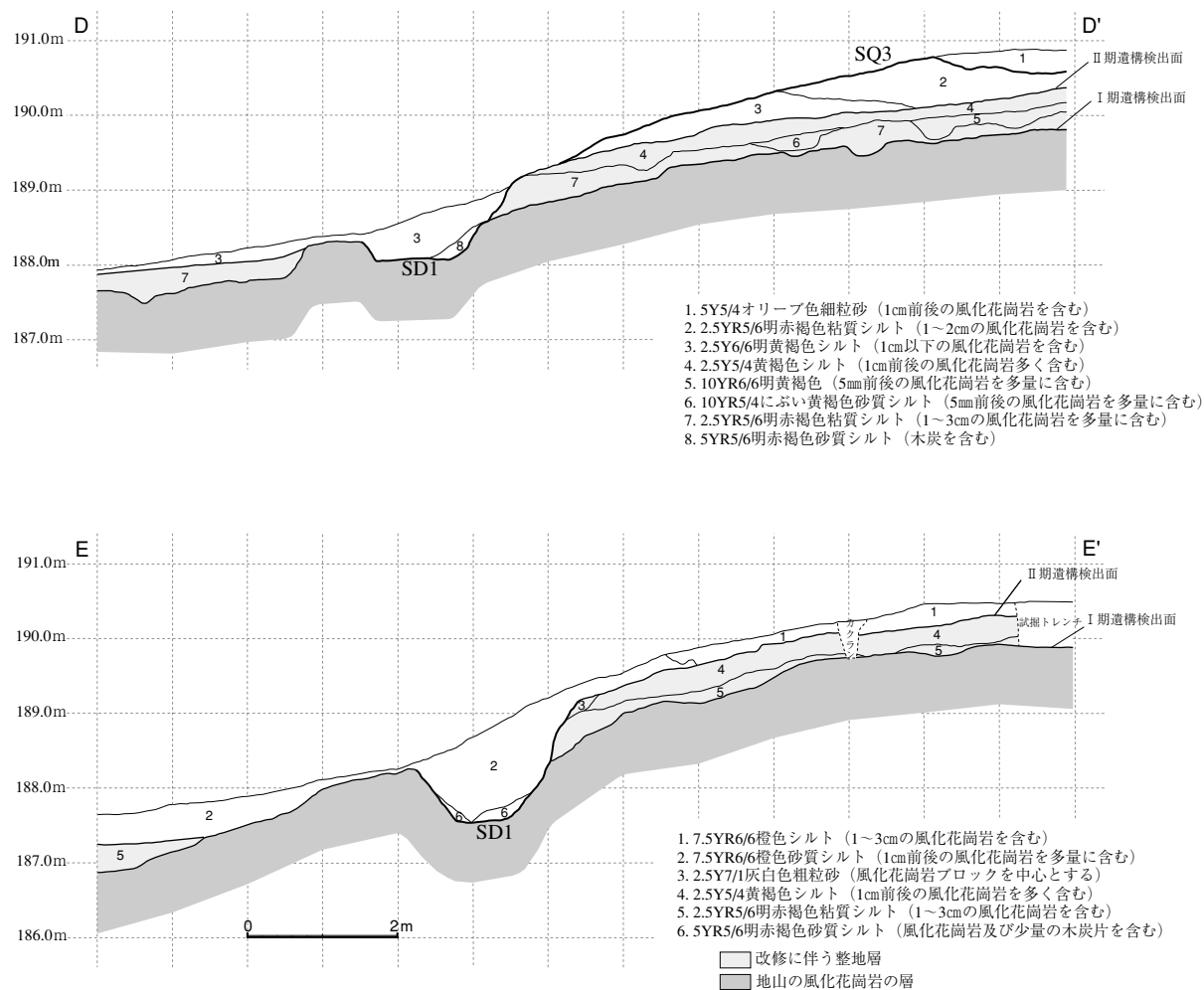
第6図 II期主要遺構図 (S = 1/600)



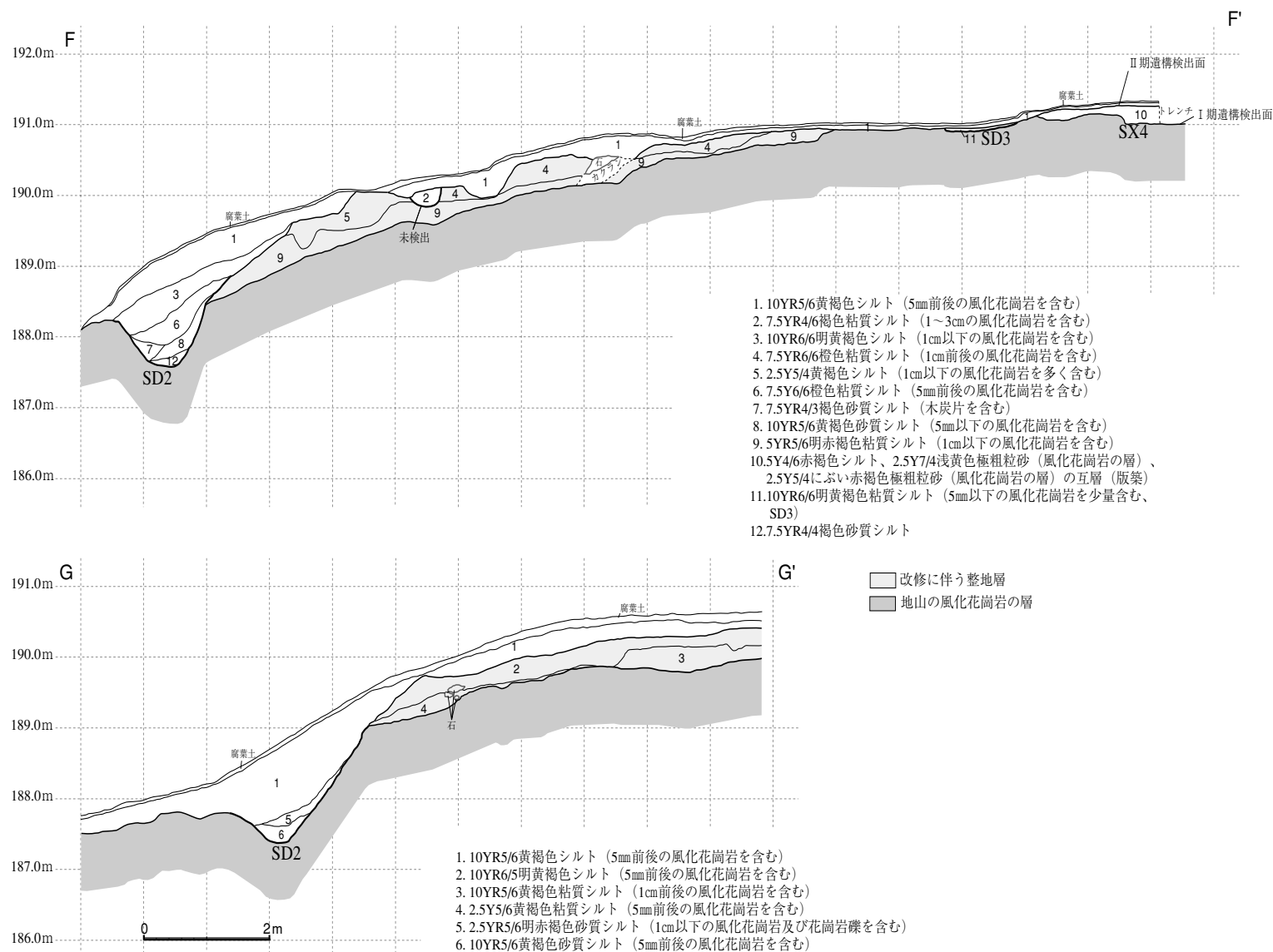
第7図 基本層位1 (S = 1/100)



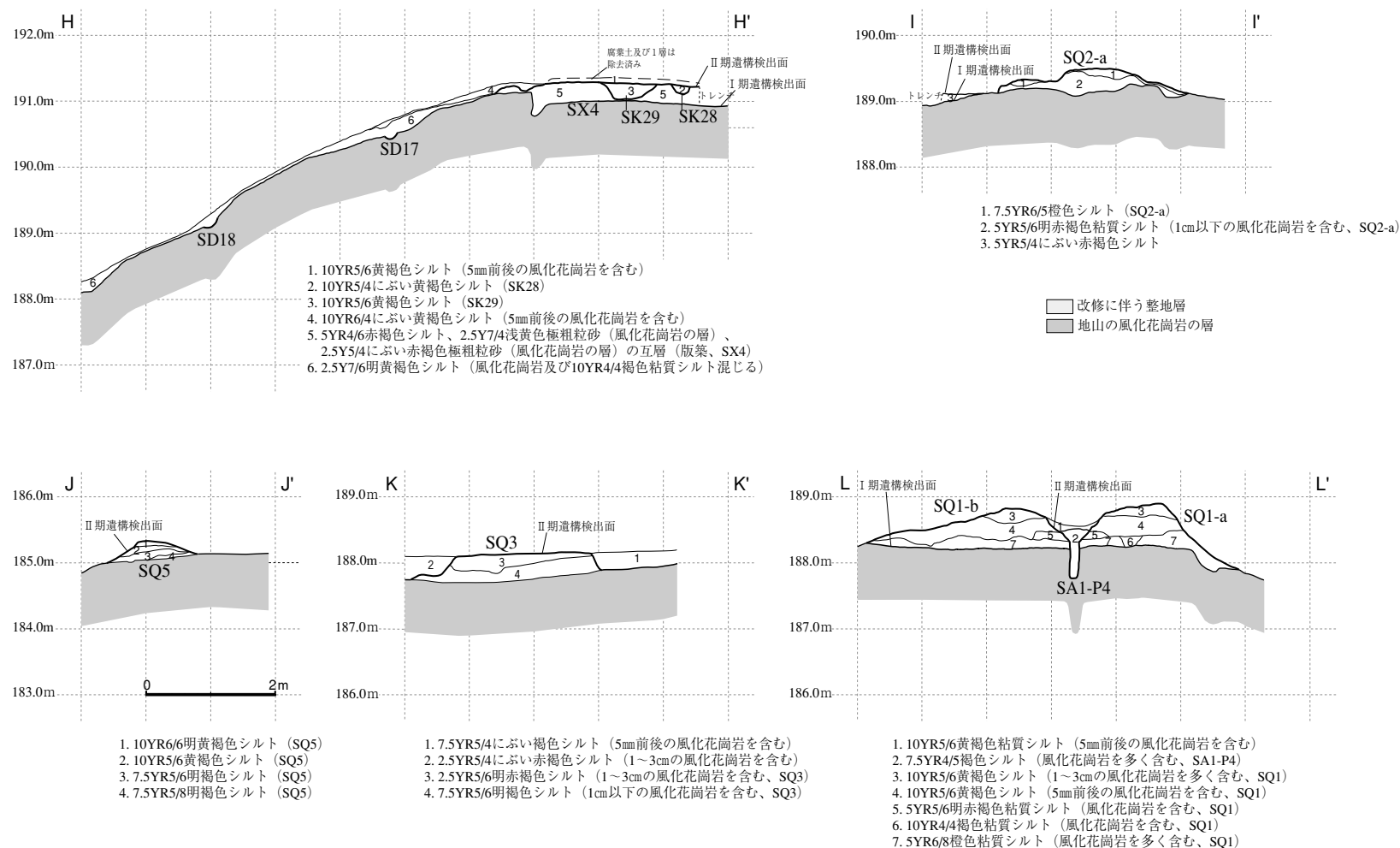
第8図 基本層位2（S = 1/100）



第 9 図 基本層位 3 (S = 1/100)



第10図 基本層位4 (S = 1/100)



第11図 基本層位5（S = 1/100）

2 調査の概要、検出された遺構

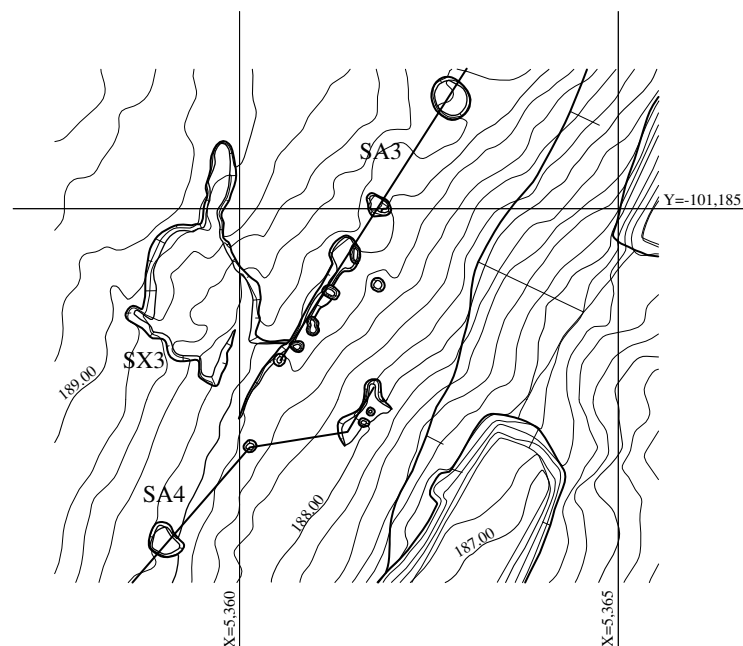
概 要

発掘調査により検出された遺構は、全て矢並下本城が機能していた時期に限定されるものと考えられ、曲輪1を中心に展開している。当初曲輪になると考えられていた南側尾根の平場については自然地形であることが確認された。城自体が整地を伴う改修を受けていることから整地前の時期（Ⅰ期）と整地後の時期（Ⅱ期）の2時期に分け、さらにⅡ期を曲輪1中心の整備期（Ⅱ―1期）と北への城域の拡大期（Ⅱ―2期）に分けて遺構を確認していきたい。

Ⅰ期 遺構が確認されるのは曲輪1のみである。

SX2 曲輪1北西SQ4の東にある方位N-22°-Eの幅1.5m、深さ30cmほどの浅い溝状の遺構。北側から曲輪1に入る虎口の可能性がある。またこの内側にあたる部分に柱穴と考えられる土坑が集中する場所があり、建物跡は確認できなかったがSX2に伴う施設のあった可能性も考えられる。

SX3 曲輪1の東側中央に位置する遺構。2m×1.5m、深さ20cmほどのややいびつな浅い方形の窪みが存在し主郭の内側に向かって不明瞭な階段状を呈する。この東でSA3とSA4が食違いを見せることなどからこの部分が虎口として使用されていた可能性が高い。



第12図 SX3遺構図 (S = 1/100)

SA2 曲輪1北で尾根に直行する形で東西に通じる柵で、柱穴を6基確認した。方位はN-60° -W。柱間は2.7～3.0mで確認できなかった柱を考慮に入れると5間以上となると推定される。ただしこの柵と対応すると思われるSA5の柱間を考えるとこの倍近い柱の数になることも考えられる。

SA3 曲輪1の東側を北から南にSX3に向かって通じる柵で、柱穴を7基確認した。方位はN-23° -E。柱間は1.2～2.0mで柱の並びも安定していない。6間以上の柵が想定される。

SA4 曲輪1東側をSX3から南へ通じる柵で、柱穴を16基確認した。方位はN-23° -E。柱間はSX3よりが1.1～1.4mで南端近くは1.4～1.8mとなる。確認できたもので15間あり、ところにより柱間が広いことを考慮すると19間ほどであったと推定される。また、SX3の東で屈曲しSA3との食違いを見せる。

SA5 曲輪1南で尾根に直行する形で東西に通じる柵で、柱穴を12基確認した。方位はN-60° -W。柱間は1.2～1.8mで11間分を確認した。

SQ4 曲輪1北西SX2の西側で東西方向に3m程度残る幅1.7mほどの土塁状の高まりで、黄褐色粘質土によって作られ残存高で40cmほどである。SX2を意識してその両側の高さをあわせるために作ったものではないかと考えられる。

II—1 期 曲輪1とその周辺斜面で遺構が確認できる。

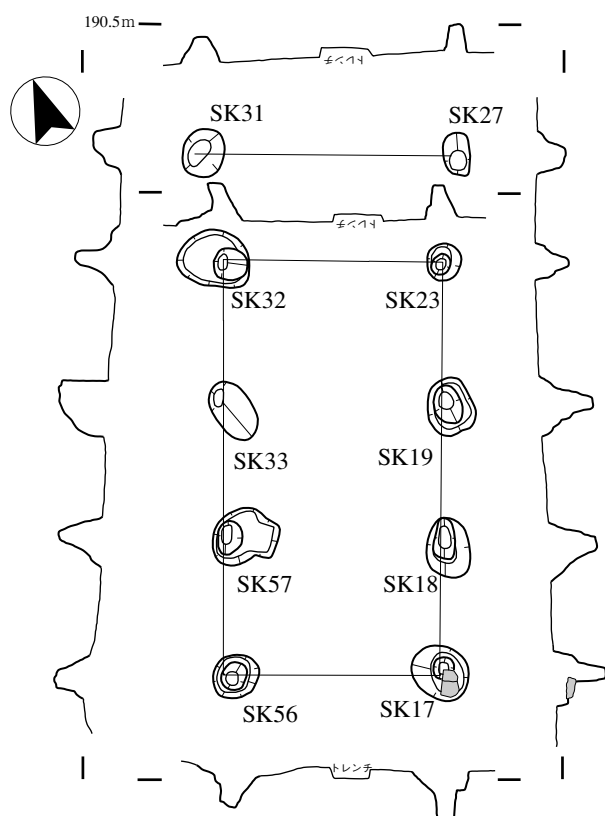
SB1 曲輪1西側南よりに位置する1間×3間の建物。方位はN-23° -E。柱間は梁行2.8m、桁行1.8～1.9mを測る。柱穴の埋土は明褐～褐色を呈するものが中心で土師質皿、天目茶碗片が出土している。なお、この建物の北にやや東西に開いた柱穴が確認されており、北側に底状のものがついていたと考えられる。

SB2 SB1の南で方位をほぼ同じくする2間×3間の建物。柱間は梁行1.8～1.9m、桁行1.8～1.9mを測る。柱穴の埋土は明褐～黄褐色を呈している。SB1、SB3よりも規模がやや大きく、SB1～SB3の要となる位置にあることからこの城の中心となる建物と考えられる。

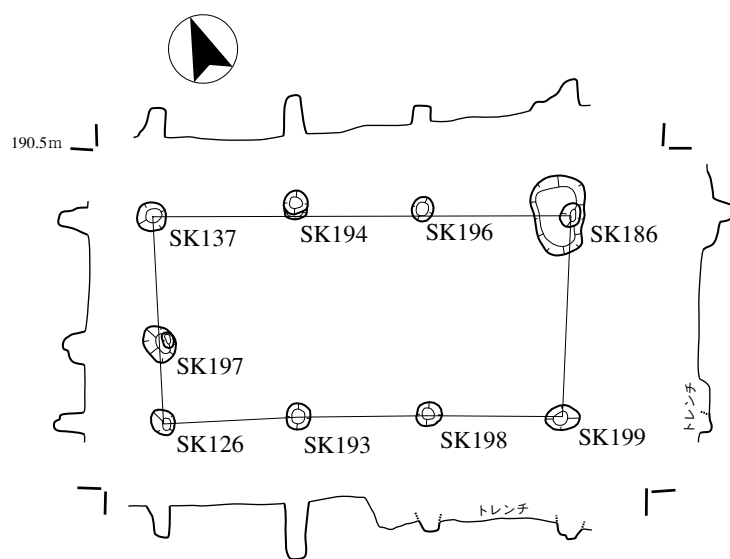
SB3 SB2の西側に方位を90°変えて立つ1間×3間の建物。柱間は梁行2.7m、桁行1.7～1.9mを測る。柱穴の埋土は明褐～橙色を呈する。SB1、2とともに平坦面の南よりにL字に並んで建つことから、3棟は同時期に存在していたものと考えられる。

SB4 曲輪1西側北よりに位置する建物。一部柱穴が確認できなかったものの1間×6間で方位N-22-Eとなる南北に細長い建物である。柱間は梁行2.3m、桁行き1.1～1.5mを測る。柱穴の埋土は明褐色～黄褐色を呈するものが中心となる。SB1～SB3までの建物と違い東側の桁行の柱通りが悪く、柱間も狭いことから、より簡素な作りのものであったと考えられる。

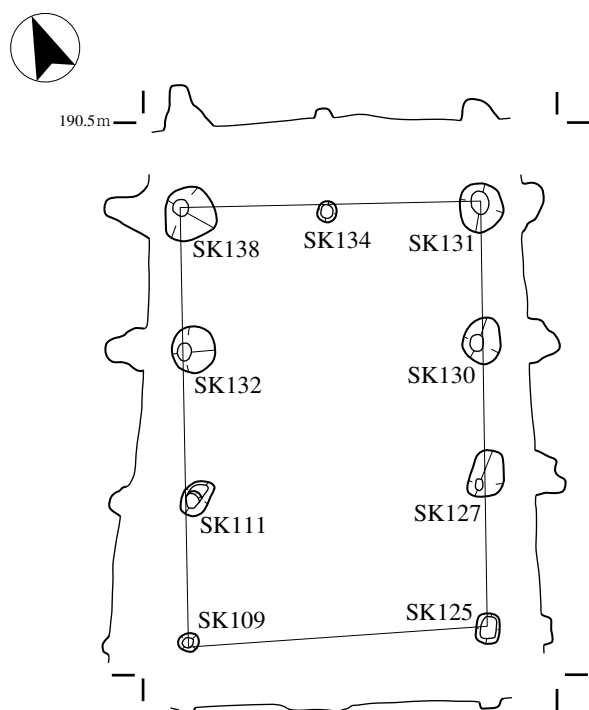
SX4 曲輪1西側中央に位置する土壇。規模はおよそ6m四方で、SD3によって南から東にかけて区画される。地山をやや削り残し、その上に黄褐色土と風化礫を交互に重ねての版築状になっており残存高は30cmほどである。土壇上には柱穴が多くあるが建物として確認できなかった。なお、土壇が地山面から構築していることからI期段階での構築の可能性もあるが、他の建物がこの部分を避けて建てられていることからこの時期にも何らかの規制が働いていたものと考えられる。



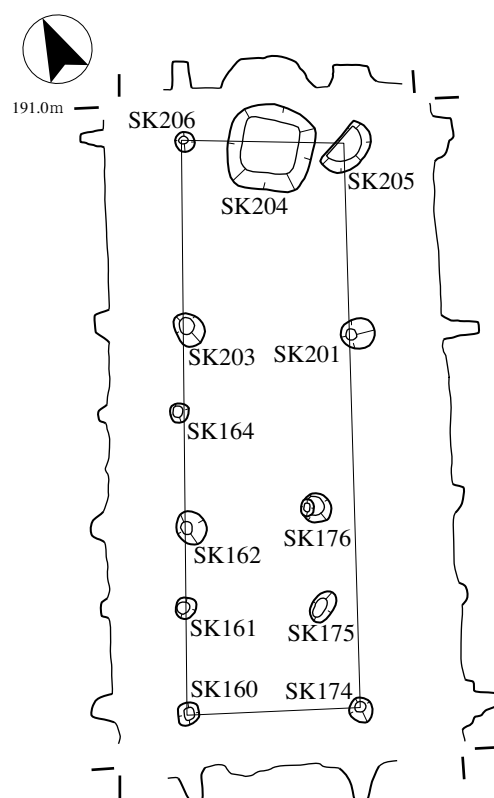
SB 1



SB 3



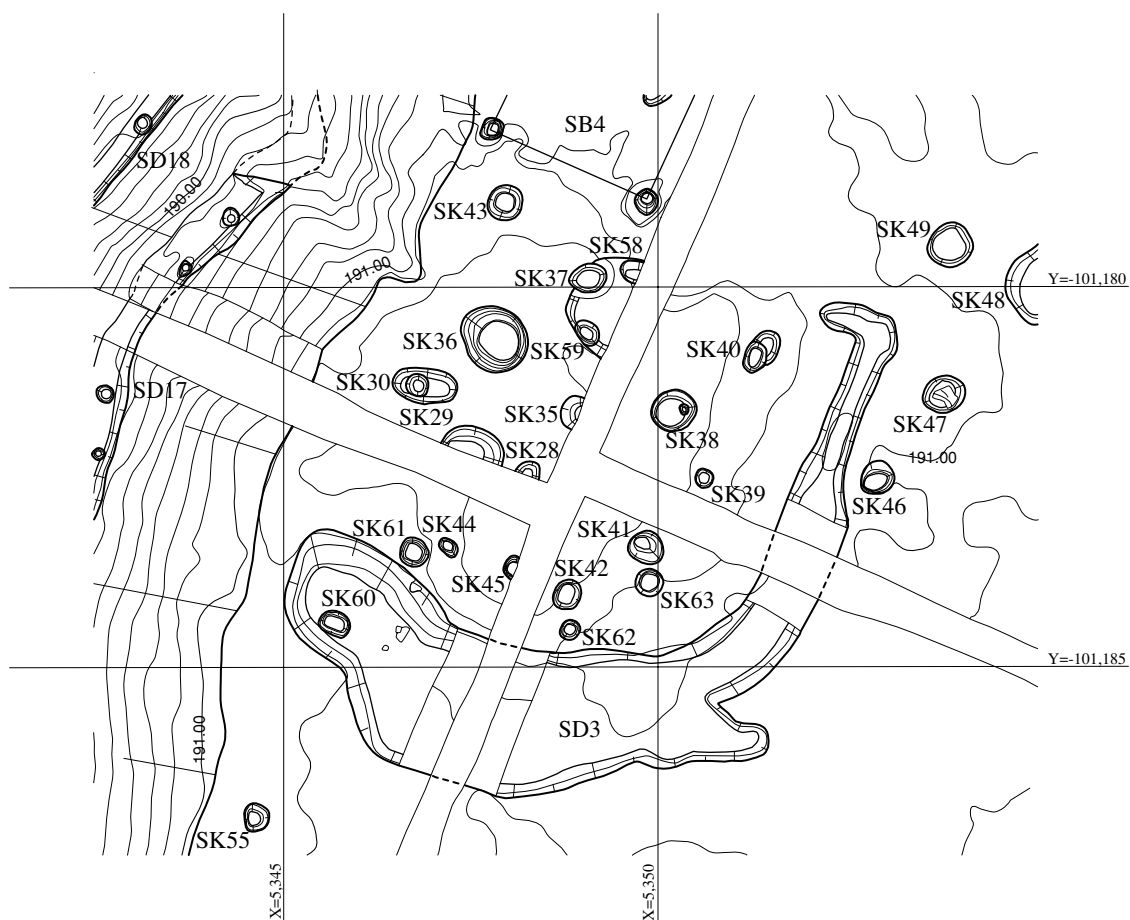
SB 2



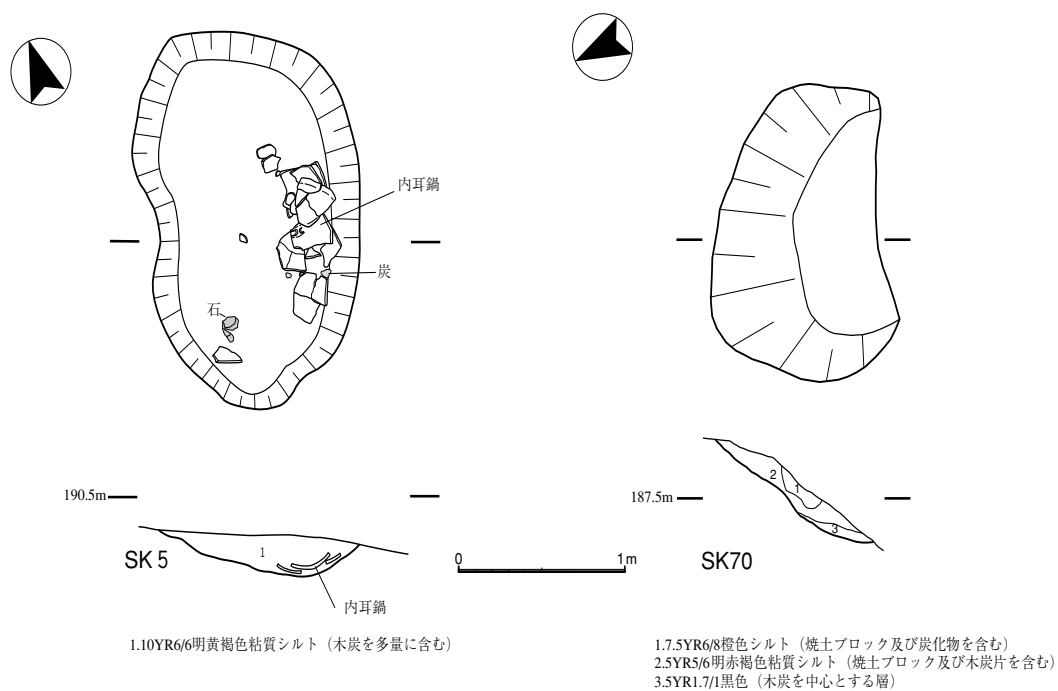
SB 4



第13図 II期建物平面・断面図 (S = 1/100)



第14図 S X 4 遺構図 (S = 1/100)



第15図 SK 5・70 平面・断面図 (S = 1/20)

SD1 曲輪1東側に沿って2mほど下をSQ3の南から南へ通じる長さ25m、幅1.5m、深さ40～80cmの溝。溝北端から16m付近に段差があり15cmほど下がる。溝埋土から播鉢、内耳鍋、丸瓦が出土している。

SD2 曲輪2東側に沿ってSD1の南からSQ1-aの北まで通じる長さ27m、幅1.5m、深さ20～70cmの溝。溝の底には4ヶ所ほど段差があり10～40cmほどの高低差がある。溝埋土からは播鉢、内耳鍋、平瓦等が出土している。SD1とSD2の間が土橋状に2.5mほど切れていることから、この部分が曲輪1への入り口となっていた可能性が高い。またSD1、SD2は幅も深さもそれほどなく横堀として機能を果たすとは考えられないことから、曲輪1の整地により造り出された東側の切岸を補完するためのものであると考えられ、曲輪1との比高差を確保するために作られたものではないかと考えられる。

SD3 SX4の東側から南へとめぐる幅2m、深さ10cm程度の浅い溝。SX4を周囲と区画するために作られたものと考えられる。

SK1 SB1の西側に位置する土坑で、曲輪1の西側斜面に接するように構築されている。その形状は西側斜面部に焚き口を持つ長さ2.8m、幅1.4mの小型の窯状を呈する。焚き口付近の壁は被熱しており、埋土には炭化物を多く含んでいる。この土坑の用途は不明であるが、遺物が一切出土しないことから焼き物などの窯とは考えにくく、立地場所などを考慮すると狼煙場としての役割を持っていた可能性もある。なお、埋土に含まれる炭化材は、クヌギ・コナラなどで放射性炭素年代測定では13世紀後半にまで遡る可能性が指摘されているが、建物の向きがこの土坑を避けるように曲輪1の長軸に対して少し傾いていることからこの時期のものであると考える。

SK5 SB3の南東付近に位置する平面楕円形の土坑で長径1m、短径0.7m、深さ16cmを測る。炭化物を多く含む明黄褐色の埋土で内耳鍋1個体が潰れた状態で出土している。

SK65 曲輪1の北よりに位置する平面楕円形の土坑で長径2.7m、短径2m、深さ18cmを測る。炭化物を多く含む明黄褐色の埋土で播鉢、土師質皿が出土している。なお、埋土に含まれる炭化材は、マツ・コナラなどであった。

SK70 曲輪2に掘り込まれた深さ70cmほどの土坑で、SD26の拡張により削平されている。炭化物、焼土等を多く含む土坑となっている。

II—2期 曲輪1だけでなく、北側尾根筋にも遺構が確認される。

SD4～24 調査区の北から西斜面にかけて展開する浅い溝状の遺構で、平行して走るそれぞれの溝は90cmほどの比高差を持っており規則的に作られている。SD4～7は北からの城域への進入路を、SD8～10は西側斜面から曲輪2への進入を、SD11～SD20、SD21～SD24は西側斜面から曲輪1への進入をそれぞれ防いでいると考えられる。SD21～SD24はSQ2-a、SQ2-bを避けて作られており、その結果SD11～SD20とは50cmほど高さに違いがある。これらの溝は幅30cm、深さ30cmほどで溝の底には直径15～20cmほどの深さ10cm以下を中心とする小ピットが並んでいることが確認されている。このことから柵列のようなものを想定しうが、ピットの深さ等から高さのある構築物を作ったとは考えにくく、逆

茂木のような低い障壁を築いていたものと思われる。

SD25 SQ3の北に位置する幅1m、深さ30cmほどの溝でSX1に関連する通路としての機能を持っていたものの可能性も考えられる。

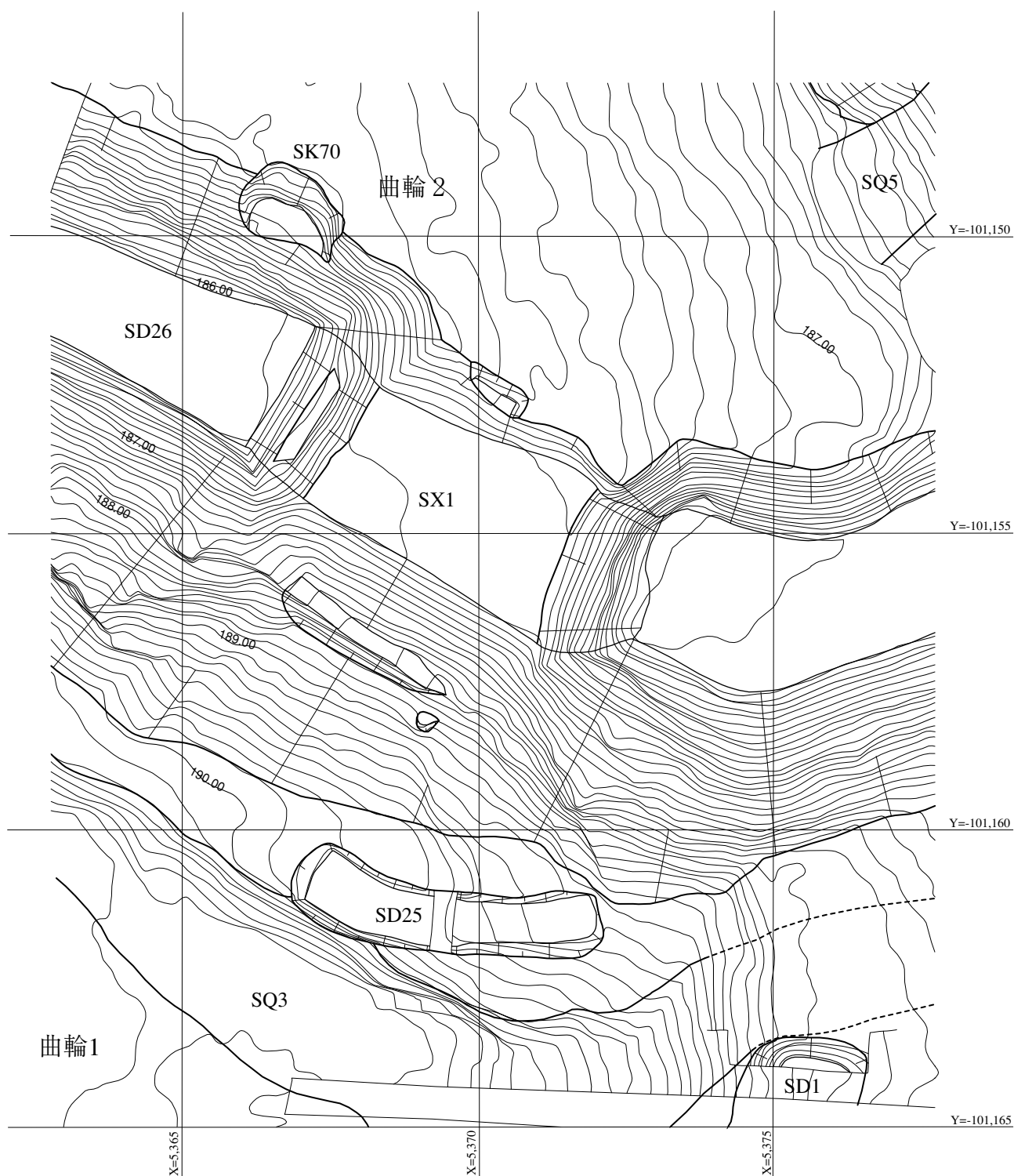
SD26 曲輪1の北側を東西に走る堀切。上幅5m、下幅2.3m、深さ2mで断面は箱堀を呈しており、西端は谷に向けて掘抜かれており、東は調査区外になるが地表面観察では堅堀となって斜面を下っていると考えられる。堀切中央東よりに地山を堀残した土橋がかかり、土橋の東側で北方向へ40°以上屈曲しており、曲輪3から曲輪2・土橋方面への横矢掛けを意識した構造となっている。堀底からの曲輪1への比高差は5mほどである。土橋西側面中央付近に箱堀状の切り込みが確認され、Ⅱ—2期の改修により削平されたⅡ—1期の堀切が痕跡として残ったものと考えられる。このことから改修は深さで50cm、下幅で50cmほどの拡張が行われたと考えられる。

SD27 曲輪1の南側を東西に走る堀切。上幅7m、下幅4.4m、深さ1.5mで断面は箱堀を呈しており、西端は堅堀とするための掘込みが作られたものの岩盤にぶつかったため幅1.2m、深さ90cmほど掘ったところで留まっている。一方東は調査区の端で堅堀としての掘削を開始した上端部が堀底に1.5mほど確認されており、その先は地表面観察から斜面を下っていると考えられる。SD27は、SD26と同じく改修が行われたようである。SD27の堀底中央付近に幅1mほどのテラス状の段が確認されることから、改修はⅡ—1期の堀を堀幅の拡張を中心に改修したものと考えられる。

SD28～SD31 北側尾根の西側緩斜面部に展開する畝状堅堀で4本の堅堀（SD28～SA31）によって構成されている。調査開始当初、自然地形による窪みと考えていたため下端部をバック・ホウにより削ってしまい上端部のみの確認となる。SD28～SD30は幅1.9～2.8mで断面は箱堀を呈する。尾根の最高所から斜面を2m以上下りたところから掘削されている。これに対しSD31は、規模や形状はほぼ同じであるが尾根道のすぐ脇から掘削されており曲輪2への入り口を狭める役割を果たしている。なおSD28とSD29の間に抜根等の影響もあり確認はできなかったがもう1本堅堀のあった可能性もある。

SD32 北側尾根東斜面のSQ6、SQ7の間に位置する堅堀。幅2.3mで尾根筋脇から掘削されているが斜面を下まで下らず3.5mほどで終っており、SQ6とSQ7の上部斜面の分断を目的としていると考えられる。

SQ1、SQ2（南土塁） 曲輪1の南を東西に通じる幅6m、残存高50cmの土塁。調査段階での便宜上東半をSQ1、西半をSQ2とした。SQ1の東側では土塁が分岐し2本の堅土塁となっている。北のSQ1-aは幅3.2m、残存高60cm、南のSQ1-bは幅2.2m、残存高60cmで分岐点より南東にのびるSA1がある。SQ1-a、SQ1-bの断面（L—L'セクション）を見ると2本の土塁はもともと1つのものであったところに柱穴を掘り込んでいることが確認された。SQ2西側では分岐し2本の堅土塁となっている。北のSQ2-aは幅3m、残存高30cm、SQ2-bは幅1.5m、残存10cmで、東側斜面と違い両者は分岐直後より大きく間をあけており、東側で確認されるような柱穴は存在せず斜面に直行するSD21～SD24が構築されている。この土塁は東ではSD2の南端に接しており西側でSD21～SD24を間に挟むことからⅡ—1期



第 16 図 S X 1 遺構図 (S = 1/100)

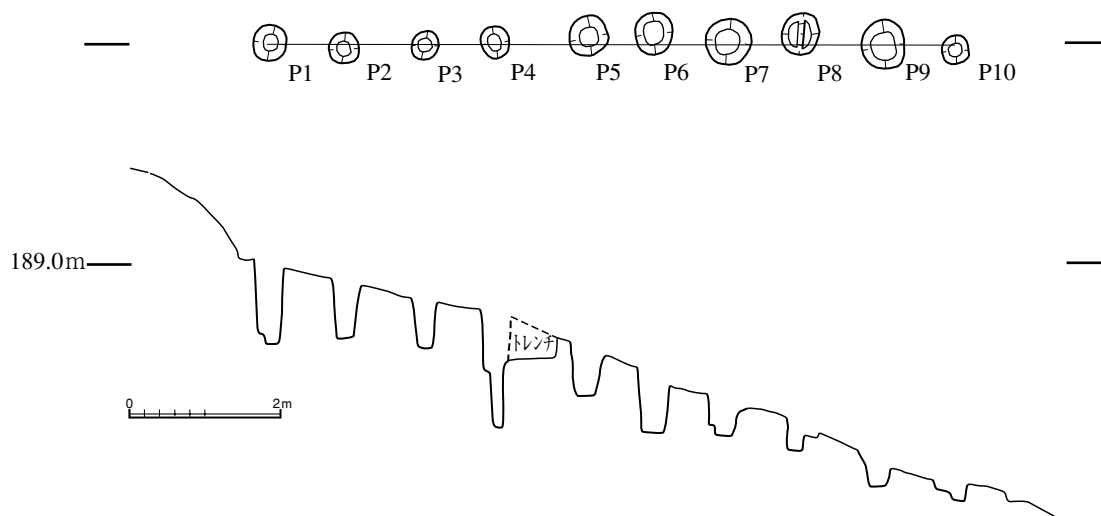
に作られた土塁を改修したものと思われる。

SQ3(北土塁) 曲輪2の北を東西に通じる幅3.6 m、残存高60 cmの土塁。西側は曲輪2北西端で終わっているが、東はSD26に沿って曲輪3を通った後、東斜面を縦土塁となって下がっていることが地表面観察から確認されている。

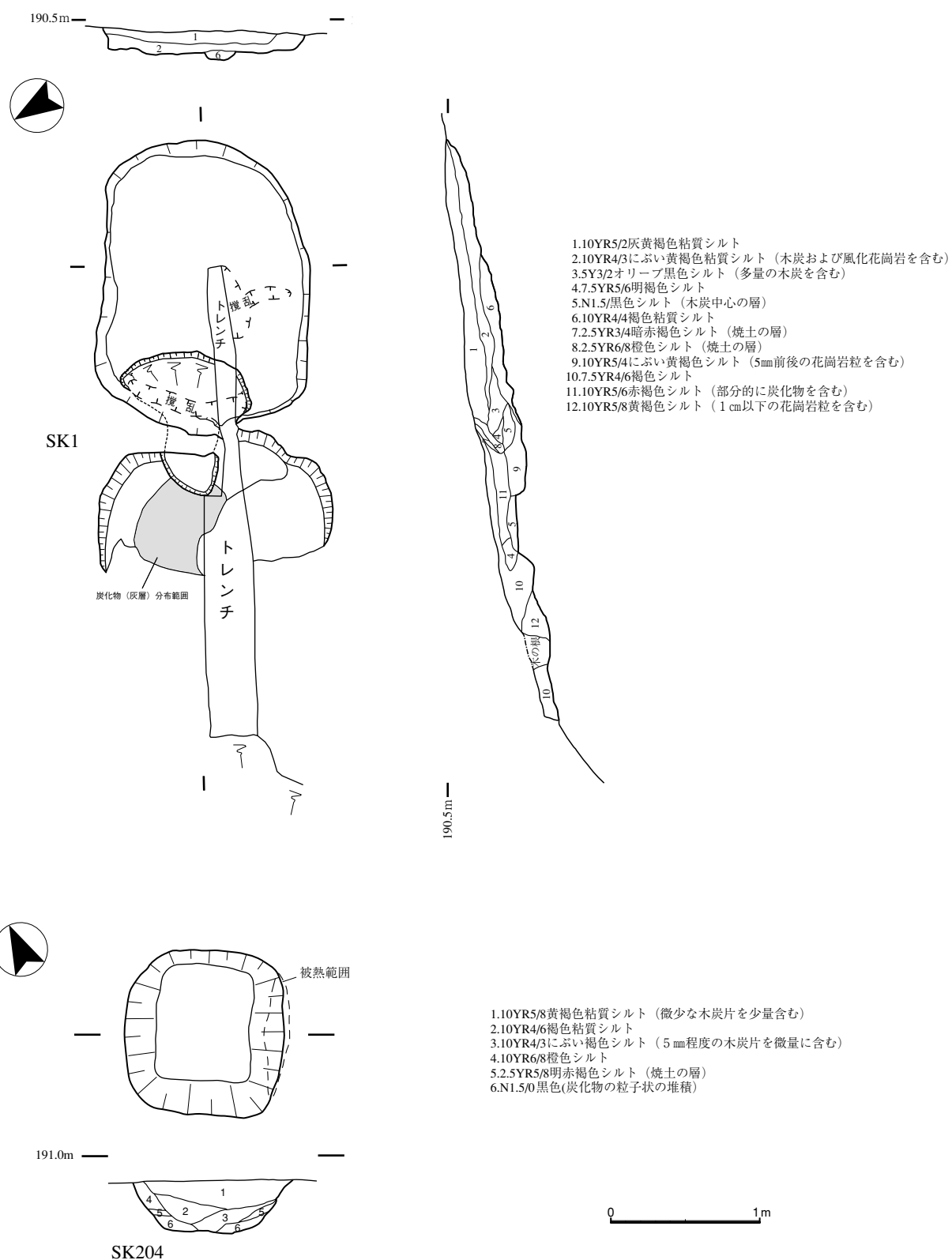
SX1 曲輪2から曲輪1への虎口。曲輪2から曲輪1へと入るためには、SD26を分割する土橋を通ることになる。土橋は曲輪2から間に階段状の段を挟み70 cmほど下がったところに位置し上幅4 m、長さ2.5 mを測り、この規模の城としてはやや不自然さを感じるほどの幅の土橋がかかっている。これをこえると曲輪1の切岸部に左上がりの幅40 cmほどの切り込んだ通路状の部分があり、ここから小さな段を1つ経てSQ3の前に達する。ここから先のルートは不明ながら地形などから考えると土塁前を右に曲がり進んだ後左に曲がって曲輪1内部へ入るものと思われる。

SA1 SQ1-a、SQ-bの分岐から6 mほどの南東にのびる柵列。直径20 cmほどの柱穴が50 cmほどの間隔で10個が並んでいる。これらの柱穴は数本ずつ掘形の底レベルを合わせて掘っており、斜面に柵を構築する上での細かな配慮がなされている。この柵はもともと柵より下で分岐していたSQ1をより上部から分岐させるために構築されたものと考えられる。

SK204 SB4の北辺上に位置する隅丸方形の土坑で、一辺1 m四方で深さ40 cmほどである。動向の底には炭・焼土が堆積し、東側壁面には被熱したあとが見られた。



第17図 SA1平面・断面図 (S = 1/50)



第18図 SK1・204平面・断面図 (S=1/20)

第3章 遺物

第1節 遺物組成と出土分布

出土遺物は土師質土器・陶器・石製品（石鏃、砥石？）・金属製品（鉦・釘）などP-27コンテナ5箱程度である。土師質土器・陶器については器種、時期別に分類し破片数（接合前）のカウントを行った。総点数は218点であった。（陶器の分類は瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏に御教授いただいた）

出土した土師質土器・陶器の中で多くを占めるのは土師質土器で土師質皿50.9%（111点）、土師質煮沸具22.0%（48点）となる。これらは破損しやすく他の陶器類とくらべると実態以上の数値を示すことがあるが、両者で全体の7割以上を占める。この他に瀬戸・美濃産陶器22.9%（50点）、灰釉系陶器碗3点、瓦3点であった。

出土遺物の半数ほどは遺構に伴うものでなく、曲輪1の整地層上面で検出された。分布の特徴として、SQ3（北土塁）の南側、SB4～SX4にかけての場所でややまとまって出土している。遺構に伴うものではSD1・SD2から瀬戸美濃産播鉢・土師質内耳鍋・瓦などが出土しており、SK5からは土師質内耳鍋が1個体出土している。またSB1の柱穴からは土師質皿・天目茶碗片などが出土している。

第2節 陶器類

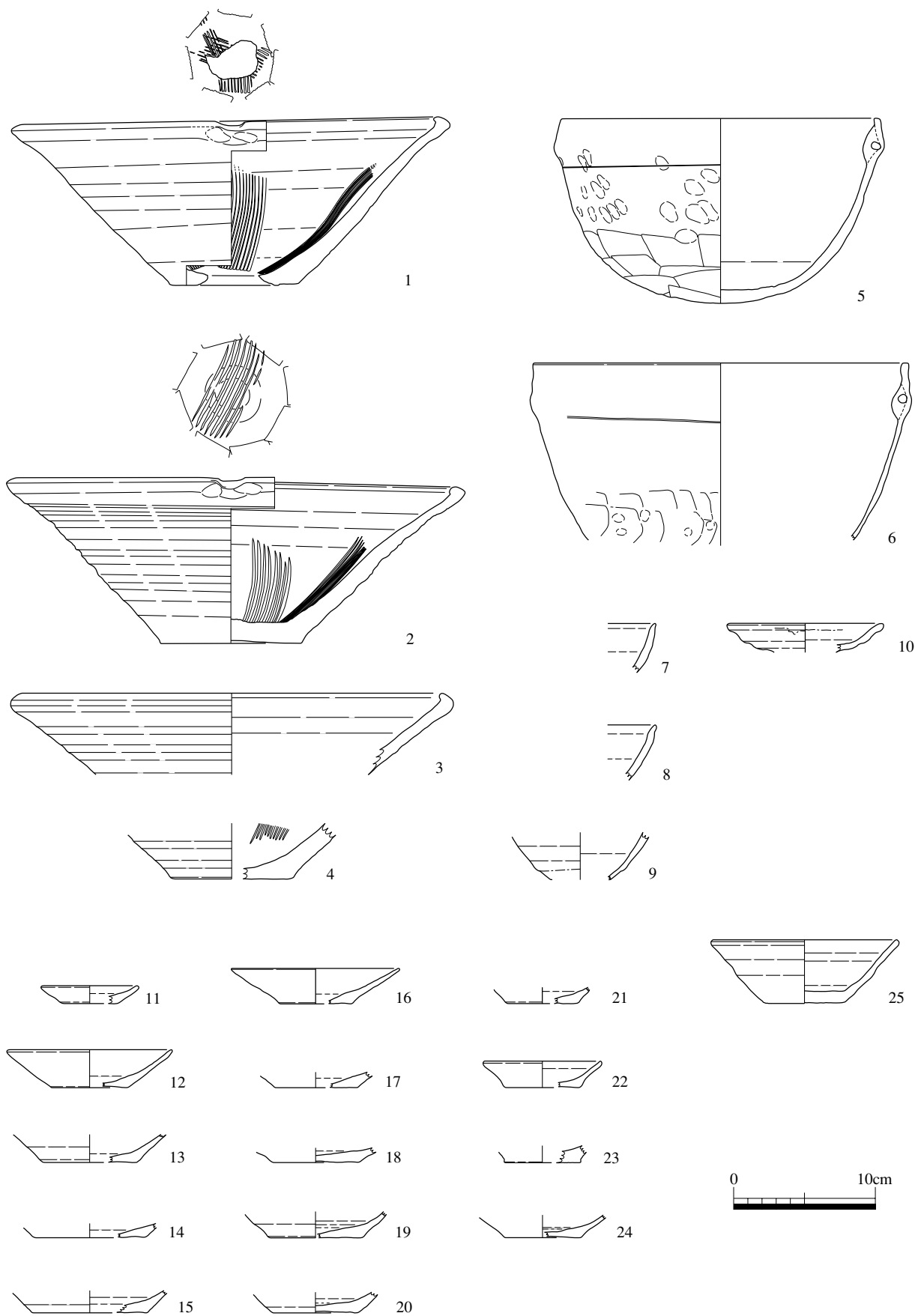
灰釉系陶器（25）：尾張型9型式と思われる碗で、口径は13.5cm、器高4.5cmである。この他2点ほど確認できるがいずれも尾張型9型式に属するものと考えられる。

瀬戸・美濃産陶器（1～4、7～10）：1～3は古瀬戸後期、新段階の播鉢で1・2はSD2から出土。1については底部を内側から突き抜いた痕跡が伺える。4は古瀬戸後期Ⅳ段階の播鉢でSD1から出土している。7～9は大窯Ⅰ期の天目茶碗。10は古瀬戸後期Ⅳ段階の緑釉小皿。この他に釜なども出土しているがいずれも古瀬戸後期Ⅳ段階～大窯Ⅰ期段階に属しており时期的なまとまりが見られる。

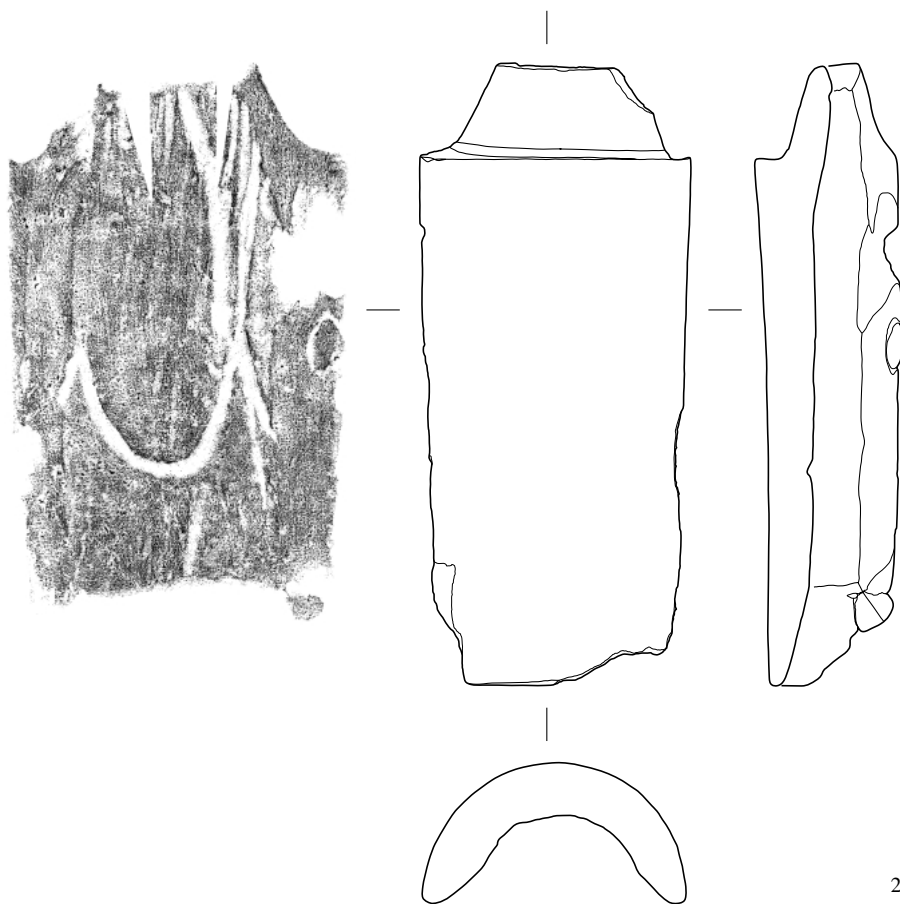
土師質土器（5・6、11～24）：5・6は土師質内耳鍋で5はSK5から6はSD1から出土している。どちらも半球形内耳鍋で体部から口縁部にかけて直線的に直立し外面に浅い沈線を持つ西三河D1類（鈴木1996）で15世紀後葉に位置付けられるものである。11～24は土師質皿でほとんどが底部にロクロ糸きり痕を残すものである。底径の分布からa) 4cm以下のもの（11）、b) 4.9～5.4cmのもの（12・16・21～24）、c) 5.9～6.6cmのもの（13・17～20）、d) 7.5cm以上のもの（14・15）に分類できる。この中で出土点数の多いのはb・cで両者合わせて70%以上を占める。

瓦（26・27）：26はSD1から出土した丸瓦で筒部長さ30.0cm、玉縁部長さ5.0cm、筒部幅13.8cm、尻小口裏面の面取り幅5.3cmを測る。裏面には「ひ」字状の吊り紐痕が見られる。また、糸切り状の弧線が残ることからコビキAによるものと考えられる。他に小片ながら丸瓦と思われる破片が1点出土している。27はSD2から出土した平瓦で長さ28.7cm、尻長22.4cm、厚さ2.3cmを測る。わずかに糸切り状の弧線が残ることからコビキAによるものと考えられる。

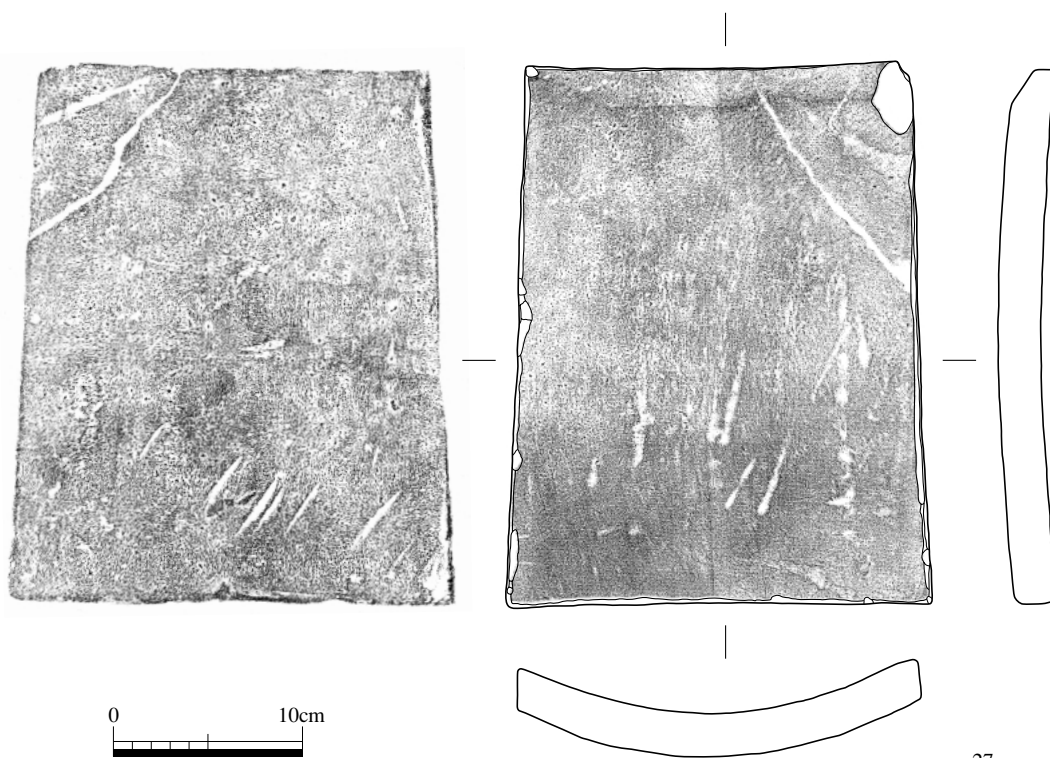
参考文献 鈴木正貴1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム



第19図 遺物実測図（陶器類）

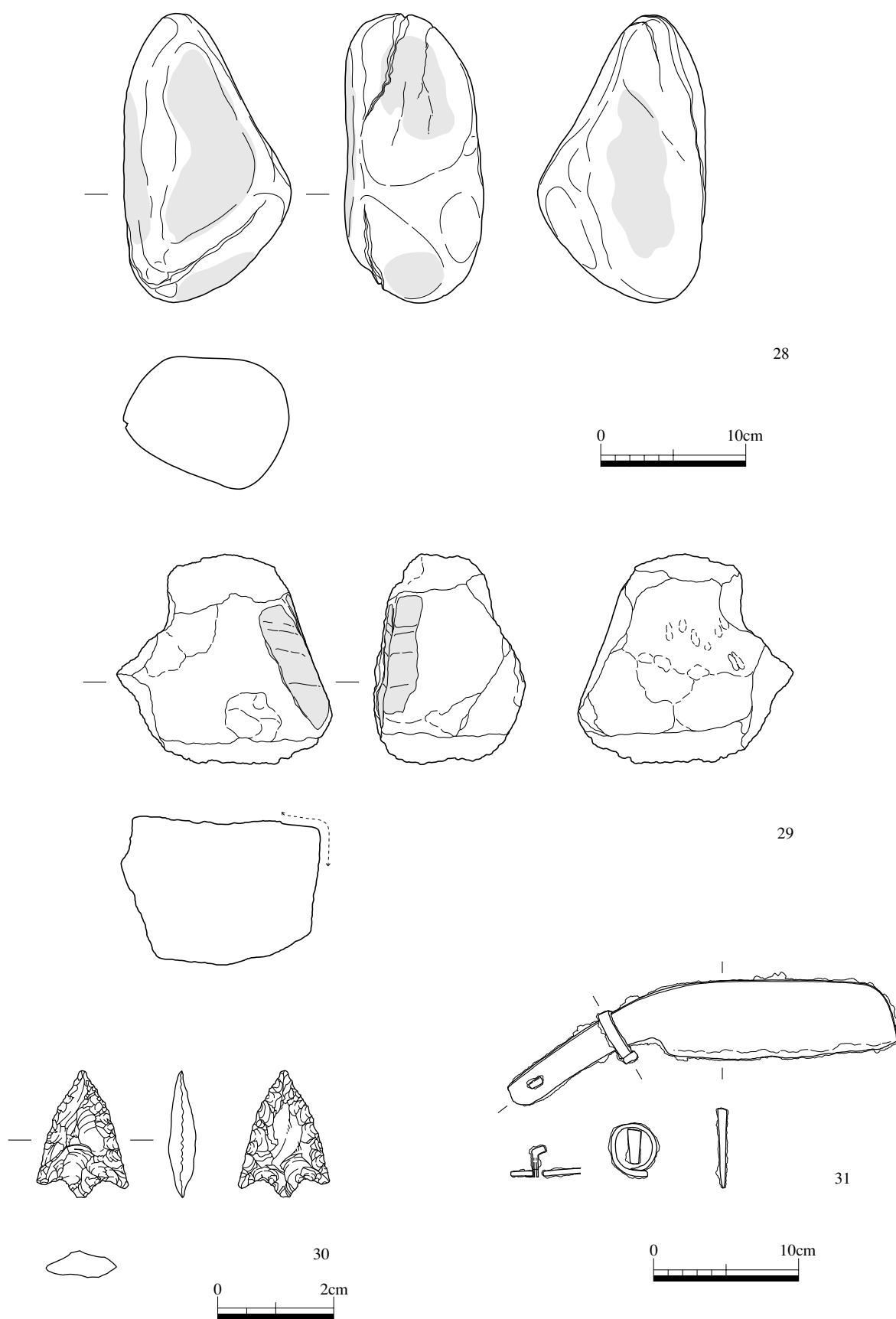


26



27

第20図 遺物実測図(瓦)



第 21 図 遺物実測図（石製品・金属製品）

第3節 石製品

石製品は3点出土しており、砥石と思われるもの（28・29）と石鏃（30）がある。

29は円礫の平坦な面を利用しており、磨耗した部分（アミ点で表示）が5ヶ所見られる。いずれの磨耗部分にも自然面の凹凸が残っており、それほど使い込まれた様子は見られない。また、金属製品用の砥石に見られるような線状痕は確認できない。長さ20.0 cm、幅11.5 cm、厚さ9.1 cm、重さ2,800 g。ホルンフェルス製である。

30は角礫を使用しており、一辺を挟んだ2面に使用による磨耗部分が見られる。石材は、大半が縞状の細粒で上下端には粗粒の部分の見られる花崗岩製である。29に比べるとよく磨耗しているが、石材の縞状の凹凸は残っている。また、敲打痕のようなものもわずかに見られる。長さ14.6 cm、幅13.8 cm、厚さ10.4 cm、重さ2,500 g。

31は凹基有茎石鏃である。鏃身部の形態は五角形であるが、片側の側縁がやや外彎し丸みを帯びている。先端がわずかに欠損しており、残存長2.2 cm、幅1.6 cm、厚さ0.45 cm、重さ1.21 g。青灰色チャート製である。
(小嶋そのみ)

第4節 金属製品

金属製品は2点出土しており、鉞（31）と掲載はしていないが鉄釘と思われるものが1点ある。

31はSD2南端で出土した鉄製の鉞。全長26.9 cm、刃渡り15.8 cmのほぼ完形品。中子部分には目釘と思われる金属も残っており、柄を留めていたと思われるリング状の金属も残存している。

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

1 はじめに

矢並下本城遺跡の遺構年代などを考えるための資料として検出された炭化物及び貝殻の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。なお、分析は株式会社パレオ・ラボに依頼した。

2 試料と方法

試料は、SD1から出土した炭化物1点、SD27底から出土した炭化物1点、肩から出土した貝殻（アカニシ芯）1点、SK204から出土した炭化材1点、SD2から出土した炭化材1点、SK65から出土した炭化材（マツ属複雑管束亜属）1点、SK1から出土した炭化材（クヌギ節）1点、SK5から出土した炭化材（マツ属複雑管束亜属）1点の併せて8点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3 結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値 -25.0% ）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	資料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1549 (AMS)	炭化物 SD1	-25.1	290 $\pm$ 30	cal AD1640	cal AD1520-1570 (66.6%) cal AD1625-1650 (33.4%)
PLD-1550 (AMS)	炭化物 SD27底	-23.7	275 $\pm$ 30	cal AD1645	cal AD1525-1555 (42.5%) cal AD1630-1660 (57.5%)
PLD-1590 (AMS)	貝殻 (アカニシ芯) SD27肩	+1.2	835 $\pm$ 30	cal AD1480	cal AD1460-1495 (100%)
PLD-1592 (AMS)	炭化材 SK204 第6層	-25.5	340 $\pm$ 30	cal AD1520 cal AD1590 cal AD1625	cal AD1495-1525 (31.5%) cal AD1555-1600 (47.6%) cal AD1610-1630 (20.9%)
PLD-1593 (AMS)	炭化材 SD2	-26.1	300 $\pm$ 30	cal AD1640	cal AD1520-1580 (72.9%) cal AD1625-1645 (27.1%)
PLD-1584 (AMS)	炭化材 (マツ属複維管束亜属) SK65	-25.7	345 $\pm$ 30	cal AD1520 cal AD1595 cal AD1620	cal AD1490-1525 (33.8%) cal AD1560-1630 (66.2%)
PLD-1585 (AMS)	炭化材 (クヌギ節) SK1	-25.5	760 $\pm$ 30	cal AD1275	cal AD1250-1285 (98.4%)
PLD-1586 (AMS)	炭化材 (マツ属複維管束亜属) SK5	-25.1	350 $\pm$ 30	cal AD1515 cal AD1600 cal AD1615	cal AD1485-1525 (38.5%) cal AD1565-1625 (61.5%)

4 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代, p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第2節 まとめ

放射性炭素年代測定を行った結果、次のようなことが分かった。導き出された年代は一部に城郭の存続時期以前に遡ると思われる年代もあるものの、大部分は16世紀中頃から後半にかけての年代を示した。このことから遺物から考えられる年代よりも新しく、少なくとも16世紀半ば過ぎまでは城としての機能を維持していた可能性が高まった。

第5章 まとめ

1 矢並下本城跡の考古学的成果

調査の結果、遺構の時期は山頂平坦部に柵列を巡らしたⅠ期、平坦部を整地し、南北に土塁・堀切を作り、建物等が確認されるⅡ－Ⅰ期、平坦部北側の尾根に堅堀群等を作って城域を北に拡大したⅡ－Ⅱ期に分けられることが確認された。Ⅰ期・Ⅱ－Ⅰ期では東に向かって作ってあるのに対し、Ⅱ－Ⅱ期になると北側尾根と西側斜面尻の整備が集中して行われていることが特徴としてあげられる。

次にそれぞれの時期について考えてみたい。Ⅰ期は、自然地形を利用して柵をコの字に巡らす簡素な構造を特徴とし、時期は出土した灰釉系陶器等から考えると14世紀中頃と思われる。Ⅱ－Ⅰ期は、土塁・堀切が作られ建物も整備され本格的な城としての改修が行われている。今回の調査で出土した遺物はもほとんどこの時期に該当するものと考えられ、それらから考えると15世紀後半～末頃と思われる。Ⅱ－Ⅱ期は、平坦部北側が整備され馬出し状の曲輪2等もこの時期に完成をみたものと思われる。出土遺物等がないため遺物からの検討はできないが、自然科学分析の結果等も加味すると、16世紀中頃～後半に該当するものと思われる。

2 地域史からみた矢並下本城跡

矢並下本城跡は、鈴木氏の築いた城と考えられている。鈴木氏の祖であるとされる鈴木平内大夫重善は、猿投神社文書に「矢並郷平内大夫入道善阿」として登場する。貞和二年（1346）中条秀長の命を受け神宮寺の造営にあたっている。重善は、東方政所として登場しており矢並を中心に高橋荘東部を本拠としていたと考えられる。南北朝の動乱期にあたり、矢並の北東にあたる足助を支配していた足助氏が南朝方、鈴木氏の仕える中条氏が北朝方であったことを考えると矢並下本城は足助氏に備える鈴木氏の詰めの城として整備されたものではないかと考えられる。その後鈴木氏は、矢作川沿いの寺部から足助・小原など西三河北部にまで勢力を拡大した。このうち矢並を治めていた寺部鈴木氏は、15世紀後半になると松平氏との争いが絶えず、明応二年（1492）には岡崎の井田野で戦い破れている。矢並下本城はこの頃には戦国期の城としての改修が行われたものと考えられる。この後しだいに鈴木氏は松平氏に取り込まれていくが、寺部鈴木氏は永禄四年（1561）の三尾同盟後も今川方であったため、永禄九年（1566）織田氏により寺部から矢並に追われ、ここで抵抗した後に駿河へ逃げたとされる。その後、この地域は松平氏の勢力下にはいるが、元亀二年（1571）には武田氏による足助侵入があり、矢並の東にあたる酒呑辺りでも戦闘があったようである。このため矢並地域は松平氏と武田氏の境の地域として緊張状態に包まれたものと考えられる。こうした16世紀後半のこの地域の緊張状態が矢並下本城の最終形態へとつながっていくものと思われる。

3 まとめ

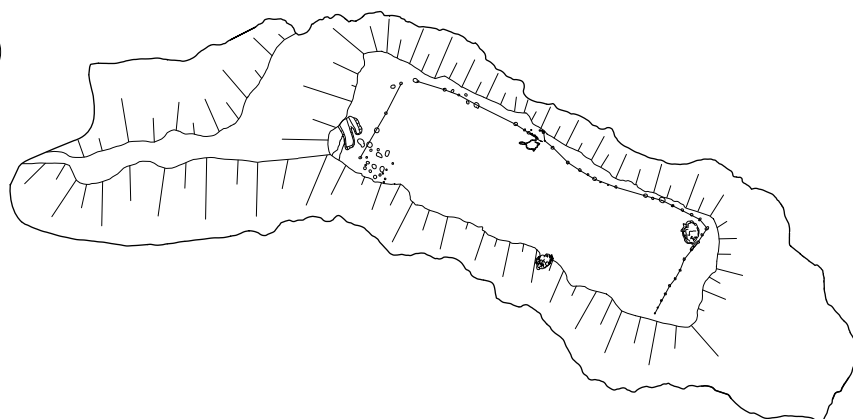
矢並下本城跡は、南北朝時代から戦国時代まで使用された可能性のあることが確認でき

た。また、この地域に基盤をおいた鈴木氏との関係も非常に強い関係があったと考えられる。こうしたことから今後は、矢並下本城跡だけでなくその周辺に多く分布する中世城館跡との関係などを含めた視点が必要であると考えられる。

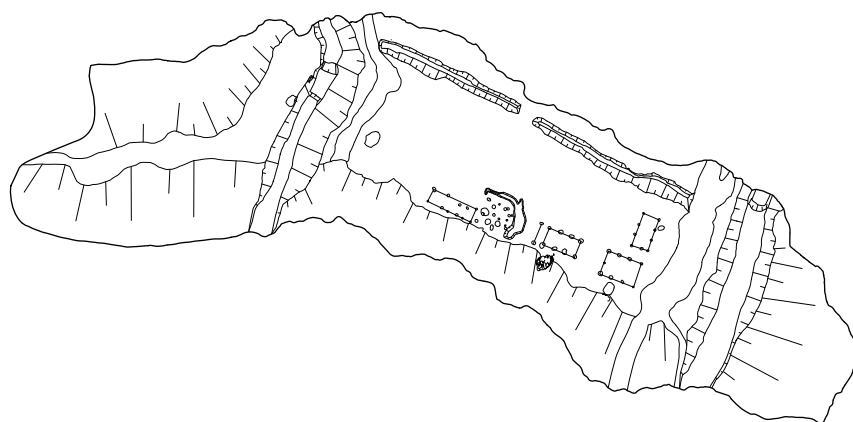
参考文献 足助町誌編集委員会 1975「足助町誌」

豊田市 1976「豊田市史」

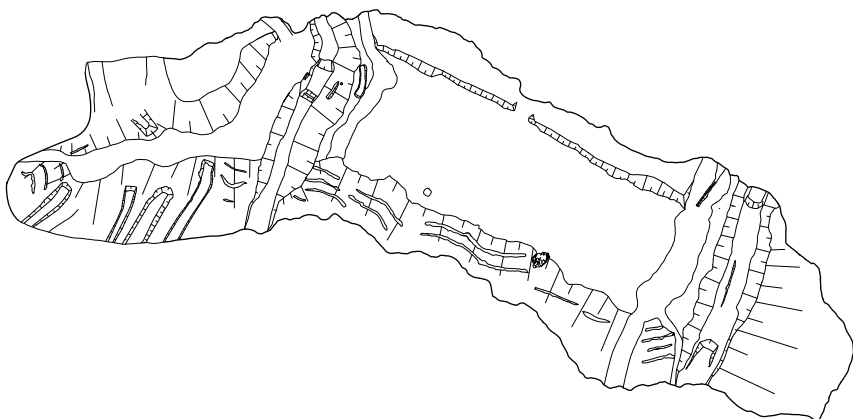
高橋村誌編集委員会 1985「高橋村史」



I 期



II - 1 期



II - 2 期

第 22 図 矢並下本城跡主要遺構変遷図 (1/1,200)



上 調査区遠景（南より）／下 調査区遠景（東より）

矢並下本城跡

写真図版
2



上 調査区全景（伐採後、西より）／下 調査区全景（2面空撮、西より）



SD 5・6 (北より)



SD 3 1 (北西より)



SD 2 6 (西より)



S X 1 (北西より)



S X 4 (南上より)



S B 1・2・3 (上より)



S D 1（南より）



S D 2（北より）



S Q 1・S A 1（西より）



SD 27 (東より)



SD 15・16 (北より)



SK 1 (東より)



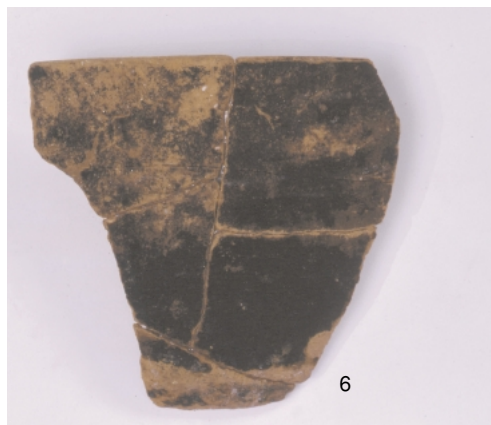
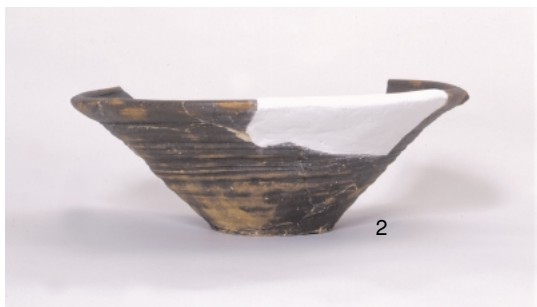
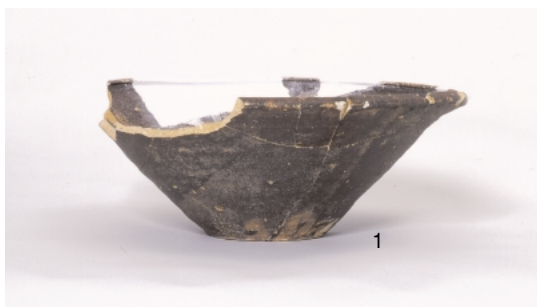
S A 4 (南より)



S D 2 遺物出土状態



S D 1 遺物出土状態



報告書抄録

ふりがな	ひがしばたじょうあと・みふねじょうあと・やなみしもほんじょうあと
書名	東畑城跡・御船城跡・矢並下本城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第113集
編著者名	宮腰健司（編集）・鬼頭 剛・成瀬友弘（編集）・武部真木（編集）・小嶋そのみ
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2003年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしばたじょうあと 東端城跡	あんじょうしひがしばたじょう 安城市東端町 中縄手	23212	5442	35度 53分 56秒	137度 1分 52秒	200110～ 200111	800m ²	自転車歩行者道路設置 工事に伴う 事前調査
みふねじょうあと 御船城跡	とよたし みふねちょう 豊田市御船町 しまだ 島田	23211	63108	35度 8分 9秒	137度 11分 33秒	200104～ 200108	3,570m ²	東海環状自動車道建設に伴う 事前調査
やなみしもほんじょうあと 矢並下本城跡	とよたし やなみちょう 豊田市矢並町 くわはらだ 桑原田	23211	63166	35度 5分 15秒	137度 13分 31秒	200006 200106～ 200109	4,700m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東端城跡	城館跡	室町～江戸	土塁・堀・溝・貝層	土師器鍋 瀬戸美濃産陶器	
御船城跡	城館跡	室町～江戸	溝・土坑・柱穴	ナイフ形石器 エンドスクレーパー 瀬戸美濃産陶器 土師質鍋、皿	御船城跡推定地 隣接地点
矢並下本城跡	城館跡	室町	堀切・土塁・ 竪堀・掘立柱建物	瀬戸美濃産陶器 土師質鍋、皿	